牧草畑でひろった彼女

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
牧草畑でひろった彼女

【Ｎコード】
Ｎ８１２０Ｔ

【作者名】
淡雪ぼたん

【あらすじ】
柊遥（ひいらぎ はるか）は親切心で幼馴染みの保証人になり、裏切られて、闇金から１０００万円の借金で追われるハメに・・・。その借金を全額払ってくれたのが、若き農場主　鬼崎竜之助。（きざき　りゅうのすけ）だった。「誰がタダで払ってやるって言った！！代わりに１年間体で払ってもらうからな・・・。」「え・・・？」　―――話しの続きは小説で・・・。《携帯創作小説サイトフォレストにて掲載した作品です。タイトルは「ちょっと・・・。」と、ずっと気になってましたので、思い切って変えました。》

第1話　最悪の出会い

柊遥（ひいらぎ はるか）　２３歳・・・。

ついこの間までは一部上場　電子機器メーカーの事務職のＯＬだった。

だったと言うのは、トラブルに巻き込まれ、会社を退職せざる終えなくなったからだ・・・。今はプー太郎だ・・・。

遥は幼なじみの片桐静香（かたぎり しずか）に完全に騙された・・・。

「保証人協会に頼むと、高額な手数料を払わなくてはいけないから、ほんのちょっと名前を貸してもらえないかな？保証人になってもらえる？

ほら・・・幼い頃からの仲で、私の事はよく分かってるでしょ？絶対に迷惑をかけたりする事は無いから、安心して・・・」

幼なじみと言う事で油断した・・・。

そして、高校を卒業してからコツコツ貯めてきた貯金、６８０万円も消えた・・・。

通帳と印鑑を盗まれ・・・。気がついた時には残高￥０になっていた。

そして高利貸の恐ろしいヤクザが家にやってきた。

静香の踏み倒した借金、利息も含めトータル１０００万円・・・。

冗談じゃないよ！！

と思ったけれど、相手はヤクザ・・・。

借金返済に水商売を強要され、会社の給料を差し押さえられ、会社もクビになり、夜逃げを決意した。

お財布の中身は２５００円。
静香に持ち逃げされる前に、貯金を降ろしておけば良かった・・・。
財布の中身を見て、ため息をつく・・・。
おっかないヤッチャンに捕まる前に、逃げなくちゃ・・・。
知人からお金を借りている時間は無い・・・っていうか・・・そんな人いないか・・・。
このお金で今の時間遠くに行ける所と言ったら、夜行バスに乗って蓼科しか思い浮かばなかった。

何も考えずに夜行バスに飛び乗った。
夜１０時発の蓼科行・・・。
料金１９００円、お財布の残高６００円・・・。

バスの中は、楽しそうな家族や、恋人達・・・。
遥１人だけ、孤独と暗やみの中にいる様な気がした。

携帯の電源は落として、闇金業者に見つからないように、俯いて、小さくなって、バスのシートに腰掛けた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日の午後２時に蓼科高原について、それから当てもなく歩いた・・・。
生きているとお腹が空く。残金６００円で、パーキングで弁当とペットボトルのお茶を買って、バスの中で食べた。残金は８２円・・・。
買いたい物も我慢して、一生懸命貯めた６８０万円が消えて・・・。

私の今の全財産は８２円・・・。
そして、借金が１０００万円・・・・。
私が使ったお金じゃないのに・・・。
なんで　なんで　なんで　なんでぇー。

悔しく、情けなく、腹が立って、タダ悲しかった・・・。

当てもなく歩いて行ったら、だだっ広い畑の真ん中にいた。
ーーー牧草畑？
何だかもうどうでもいいや・・・。ここで大の字になってずっと寝たら、明日の朝には凍死してるかな？
いや、夏だから、死なないか・・・。

大の字に寝ころんで、目を閉じてみた。

暫くしたら、彼方からエンジン音が聞こえて来た。
そしてすぐ近くで止まった・・・。

「ばかやろう！　こんな所で何してんだ！！　気付かなかったら機械に巻き込まれて死んでるとこだぞ！！善良な俺は殺人者になってるとこじゃねぇか！！　邪魔なんだよ！！　どきやがれ！！」

「えっ？」
目を空けたら、大きな牧草刈り入れの機械車が止まってて、男が降りてきた。

「あーあ。畑荒らしやがって！！　おめえ、観光客か？」

肌が浅黒く、かなり大柄の、眼光鋭くギョロ目の男が、目の前に仁王立ちしていた。すごく恐そうな男だ・・・。

年は２０代後半か？

「す・・・すいません。　今どきます」

ムックリ起き上がって、そそくさと畑から出て行こうとした。

「ちょっと待て！　おめえ自殺志願者か？　何処から来た？」

「東京です」

「こんな田舎に何でいるんだ・・・。何しに来た？」

返答に困って答えられない。

「身分証は？」

そんなもの見せたら、闇金に居場所を知られてここまで取り立てにやって来るかもしれない・・・。

逃げるしかない・・・。全速力で走った・・・。

「オイ！コラ！！　まてーっ！！」

その眼光鋭い大男が追いかけてきた。メチャクチャ早い。

捕まってなるものかーっ。

でも畑の草に足をとられて、なかなか前に進まない・・・。

「ウォリャーッ！！」

後ろから男が覆いかぶさってきて、私はうつ伏せにペチャンコに倒れた。

顔が畑にめり込んだ・・・。

捕まってなるものかっ！！
足をバタバタさせて、押さえつけられている男を無茶苦茶にガンガン蹴飛ばした。
その蹴りが男の急所に入って、男が急所を押さえ痛がって畑にうずくまった。

『今だ！！』
全速力で走って、逃げ切った・・・・。
・・・と思った瞬間、男に足を掴まれて、思いっきり畑に倒れ込んだ。

凄い馬鹿力男だ・・・。ガッチリ押さえ込まれた。
お腹も空いて、力も湧かず・・・力尽きて、諦めた・・・。

「おい。俺はとって食おうと思ってんじゃねえぞ。訳話してみろ」

「はいっ・・・」
今までの経緯を話した。
話しても、どうなる訳でもないが・・・。もしかしたら匿ってくれるかもしれない??ほのかな期待を胸に・・・。

「分かった。で、その闇金業者の連絡先は?」

ちょっと変にも思ったけれど、連絡先の書かれた督促状の封筒を渡した。
そしてその男は、自分の携帯を出してそこに電話した。

『え?えええーっ??』
何で電話するのよ。私を引き渡して闇金から報償金を貰う魂胆?

「何で？　何で電話するのよ！！！」
その男の携帯を奪おうとして、振り払われた。
「いいから、俺が話しつけてやるから」
「居場所教えたら、連れ去られて売り飛ばされるかも．．．。ここまで逃げてきたのに．．．」
「おめえ、一生逃げ回るつもりか？　正々堂々と話しつけるんだよ」
「話して分かってくれる相手じゃないし．．．」
「ごちゃごちゃうるせえ女だな。俺に任せろ！！」
「責任とってよ。売り飛ばされたら一生恨んでやるからねっ！！！」
「で、おめえの名前は？」
「柊遥（ひいらぎはるか）」
「俺は、木崎竜之介（きざきりゅうのすけ）だ。おめえの借金、俺が払ってやっから」
「え？」
目が点になった。
「その変わり、1年間体で払ってもらうぞ」
意地悪そうな顔でニヤリと笑った。
「ええーっ」

「嫌なら、金は出さん。　闇金におめえを引き渡す」

「そ・・・そんなぁー」

（第2話に続く）

第2話　赤鬼と干物

「ちょっと！！私の体が目当てでそんな事言ってるわけ・・・？！」

「別に目当てじゃないけどよ。見も知らねえやつに、普通タダで１０００万円払うか？」

「ない・・・」

「じゃあ観念しろ」

「分かった・・・」

そう言って、遥はだだっ広い牧草地に大の字でゴロンと寝た。

もうヤケクソだ！！ヤクザに売られるよりは、この男の方がましかも・・・。

「もうどうにでもなれ！！　好きにしなさいよ！！」

「へっ？　何のパフォーマンスだ？　おめえ牧草畑に寝ころぶのが好きだなぁ・・・」

「だって、１年間あんたに体を提供するんでしょ？」

その途端「ガッハッハッハッ・・・」農場にこの男の大きな笑い声が木霊した。

「俺だって好みがあるんだよ。おめえ見たいなペラッペラの干物見たいな女興味ねえよ。　１年間牧場で働けって言ってんだよ」

「なんだ・・・」

「ホッとしたか？」

「うん」

「だが・・・。途中でばっくれたら、地球の裏側でも追いかけて、おめえを地獄の底にたたき落としてやるからな！！俺は、約束を破るヤツは絶対にゆるさねえからな」

「分かった。１年間タダ働きすればいいんでしょ？」

「簡単に言うけれど、そんなに甘いもんじゃないからな」

「売り飛ばされるよりも全然まし・・・。やるわよ！！」

「ようし！　干物いい根性だ。借金分一生懸命働くんだぞ」

「受けて立とうじゃないの！　赤鬼！！」

遥がギッと竜之介を睨んだ。

「何で俺が赤鬼なんだ？」

「だって乱暴だし、真っ赤になってガーガー怒るし・・・。赤鬼そっくり・・・。私は何で干物なのよ！！」

「おめえはペラッペラで、海岸で干されてるアジの干物そっくりなんだよ」

お互いに目と目を合わせ、ビシバシと火花を散らした・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

この木崎竜之介の牧場は、物凄く広かった・・・。
観光客相手に、牧場とレストランや物産店も経営してて、ソーセージなどの肉製品や乳製品の加工食品工場も持ってる・・・。

１０００万円バーンと肩代わりしてくれる財力を持ってるヤツだと言う事は、良く分かった・・・。

だけど、口が悪くて性格悪そう・・・。
背が高くて、顔は意外とイケテル・・・。
でも全然私の好みじゃないけどね。

まあ1年間働いて、後はバイバイだ・・・。

竜之介の家にやって来た。
大きなログハウスだ・・・。

竜之介の姿を見つけて、ベージュの毛のラブラドールレトリーバーがすっ飛んできた。かなりデブな犬だ・・・。
「聡美　帰ったぞ・・・」

「聡美?!」
後で分かったが、この犬の名前はふられた彼女の名前らしい・・・。
なんだかやぼったくてみみっちい男だ・・・。

「干物。この部屋をつかわせてやる」
その部屋は、8畳ぐらいの洋間で、白い壁紙にパインの腰壁がグルリと巡らされていて、ナチュラルでシンプルな木のベッドに、ベッ

ドファブリックは淡い若草色の木の葉の模様で意外と可愛い・・・。ベッドに合わせたサイドテーブルの上には、アンティークなオレンジ色のガラス工芸のランプ・・・。窓辺にはベッドと合わせたナチュラルでシンプルな木のデスク、窓は両開きのオーニングウィンドウ。二重ガラスだから冬は寒そうだ・・・。

カーテンは可愛らしい若草色。1間ぐらいのクローゼットもついている。

「ありがとうございます」

「農場の仕事以外に、食事は従業員と一緒に食堂で食べるからやらなくて良いが・・・。この家の、掃除と洗濯も頼んだぞ」

「分かりました」

「後は、聡美の世話もな、朝昼晩3食あげる事。デブだからダイエットフードを食べてるが、油断すると盗み食いするから気をつけてくれ。散歩は聡美が勝手にするから要らん」

「分かりました」

「分からない事があったら聞いてくれ。以上解散・・・」

解散って、ここは軍隊か?!

「そうだ、腹減ってるんだろ。食堂に行って飯食べるといい・・・。この家の前に大きな宿舎があるだろ?あそこが従業員の宿舎で、食堂と男女別れた広い風呂もあるから・・・。風呂にも入って来い。この家の風呂でも良いが、俺に一声かけねえと、ニアミス起こすか

もしれねえからな」

「はい」

「そうやって、素直に返事するとまあまあだな」
そう言って竜之介は、グリグリと遥の頭を撫でた。

「はいっ？」
子供じゃないんだっつーの！！

「じゃあ明日から、一生懸命仕事するんだぞ。闇金の件は俺に任せろ」

「ありがとうございます」

「あ・・・。明日の朝は８時から養豚場の世話だから、初日だから７時には食事と身支度を済ませて、養豚場前にいろ！分かったな」
そう言って、竜之介は手を降って部屋を出ていった。

「はい」

とり合えず良かった・・・。
もう死んじゃおうかな？って思うぐらい、ここに来るまではこの世の終りみたいな気持ちだったのに・・・。

もう闇金業者に追い掛け回される心配もない・・・。
嬉しい・・・・。
バンザーイ！！と手を伸ばしてベッドに大の字で寝ころんだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

宿舎の風呂に行った。
宿舎は男が1階、女が2階に別れてる。
風呂も男1階、女2階に別れてて、どこかの観光ホテルのように立派で広い・・・。
お湯は温泉だ・・・。
シャンプーや石鹸もついてるし、ドライヤーもついてるし、タオルやバスタオルも常備されてる・・・。
「すごい立派だ・・・。」

食堂に行ったら、竜之介から話しを聞いていたようで、調理師のおばちゃんがすぐにご飯を用意してくれた。

「あんた新入り?」

「はい」

「社長の家にいるんでしょ?婚約者かい?」
おばちゃんがニヤニヤ意味深な顔で見る。

「やだなぁ。そんなんじゃありませんよー」

「そうかい・・・」
愛変わらずニコニコしてる。
まさか借金肩代わりして貰って、1年間労働だなんて思ってないよね。
私は今日から1年間、強制労働の囚人みたいなもんなんだよー。

おばちゃんのご飯は凄くおいしかった・・・。

「ご馳走さまでした。とってもおいしかったです」
「食事の時間は、朝６時半朝食、昼１２時昼食、夜はスタッフによって時間変動があるから、６時半から９時までの間に食べに来てね。よろしくね！」
「はい、よろしくお願いします」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ログハウスに戻って来たら、リビングに赤鬼がいた。
「おい！干物、おめえ荷物何もないのか？」
「そうだけど・・・。だって慌てて夜逃げしてきたんだもの」
「しかたねえな。買い物に行くぞ・・・。来いっ」
竜之介の車は外車のＲＶ車だった・・・。
サングラスなんかして、カッコつけやがって・・・。
後部座席にはラブラドールの聡美が乗ってる。にやけた顔の犬だ・・・。
茅野のショッピングモールに来た。
「ここじゃ、東京みてえに垢抜けた店はねえが、この辺ならまあ、一応必要なものが揃うだろう・・・。化粧品とか服とか下着とか・・・。要る物買ってこい！」
そう言って、竜之介は１０万円私にくれた。
「こんなに、いいの？」

「おめえにつけとくから。労働して返せ！！金が余ったらとっておけ！！」

「げっ。そうやって借金苦に落とし入れて、私を一生タダ働きさせる魂胆ね」

「ごたごたと・・・。めんどくせえ女だな。おめえにやるよ小遣いだ。早く要るもの買ってこい！おれはそこのカフェにいるから」

「あの・・・。赤鬼・・・。ありがとう・・・」

いつも睨んだ顔ばかりしてる竜之介が笑った。
へえー。あいつもあんな顔するんだ・・・。

元々コツコツ貯金して、質素に暮らしていた遥。
買ったのは、スーパーで良く売られている安い化粧品一式と、下着類と靴下に、ジーパン&Tシャツ数点と　ジャンパーに運動靴に日糧雑貨・・・。それにパジャマ。それから、目覚まし時計・・・。

「終りました」

「早ぇーな。これだけか？　女ってのは、買い物し始めると長いもんなのに・・・」

「だってこれから、強制労働の過酷な日々がやって来るんでしょ？
かわいい服なんて要らないし・・・」

「年頃の娘なんだから、少しぐらい買えよ」

「いいよ」

「来い」

そう言って、高そうなブランド物のお店に引っ張って行かれた。

なかなか洒落た可愛いお店だ。

竜之介はジジッと舐める様に上から下まで見てから、これとあれとそれと・・・。勝手に店員に服を渡して「さっさと試着してこい」と言った。

本当に身勝手なヤツだ。

はっきり言って「ウザイ!!」

でも、なんかちょっと不器用な優しさがいいかも・・・。

決して私の好みの男じゃないけどね・・・。

一通り試着してから「全部くれ」って言って、竜之介はカードで買った。

ゲゲゲッ!!ブラックカードだ・・・。

あいつって本当に金もってるんだ。

お会計は　『すうじゅうまんえん?!』『ウソーッ!!』

まさかとは思うけど、そうやって借金苦に落とし入れる魂胆かもしれない・・・。気をつけよう・・・。

赤鬼・・・。あんたは危険な男だ!!

（第3話に続く）

第3話　養豚場に潜む小鬼

翌朝は４時３０分に起きた。
家の掃除、洗濯もしろって言うから、早めに起きてやらないと7時に養豚場前に集合だから、もし間に合わなかったら心配だったし・・・。

遥の姿を見つけてラブラドールの聡美がしっぽを振って、体をすり寄せてきた。
「聡美、ほらダイエットフードだよ！　これを食べて、少しは痩せなさい！！」
ドッグフードをあげてから、水入れを洗って、水を入れた。
「聡美は犬のくせに、ミネラルウォーターなんか飲んでるの？贅沢な犬だな・・・」

洗濯物は、あいつの物と一緒に洗濯機に入れるのは嫌だから、別々に回した。
「人にパンツまで洗わせて・・・。チェッ」
サンルームに干して、夜に取り込むから洗濯物がしけてるだろう・・・。
少し除湿器を回して、乾かさないと・・・。
掃除機をガーガー回していたら、あいつが起きて来た・・・。
「朝っぱらからうっせーなー」
「赤鬼おはよう！」
「朝っぱらから掃除か？」

「だって、家の掃除と洗濯もしろって言ったじゃないの。強制労働が待ってるから、今やらないとやる時間が無いもん」

「へえ、結構キッチリしてるじゃん。でも、そんな力まなくても適当で良いから」

「犬も同居してるし、綺麗にしないと嫌だし」

「潔癖症だな・・・」

ちょっと呆れ顔の竜之介。

「そうだ、おめえ一応俺は雇い主なんだから、赤鬼はやめてくれよ」

「ちゃんと仕事中は話し方もキチンとするよ。でも、あんたが干物って言うのをやめない限り、赤鬼って言うもんね」

「おめえは何処から見ても干物だー！！」

今のセリフすごく力が入ってて、なんか嫌見っぽい・・・。

「ふんっ！！あんただって赤鬼だよー」

「ちぇっ。頑固者だなー」

お互いに目と目を合わせて火花を散らす。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

遥は7時に養豚場の前に突立っていた。

広大な牧場・・・。養豚場までは意外と遠かった。

「早めに食事を済ませ、出て来て良かった・・・」

ここは本当に広い・・・・。
豚舎の前に立っていたら、竜之介がやって来た。
「おう、時間厳守！　偉いぞ」
真面目な遥の様子に、満足げにニカリと笑った。

「よろしくお願いします」

「うむ。じゃあまず、管理棟内のシャワールームでシャワーしてから、置いてある専用服に着替えて、豚舎の中に入って来い。必ず長靴で消毒液の上を歩いて来いよ」

「はいっ」

着替えて豚舎の中に入ったら、竜之介も着替えてやってきた。

「まず、従業員を紹介する・・・」
従業員は男８名、女１名・・・。
こんな広い豚舎を、こんな少ない人数で管理してるんだ・・・。

ここで紅一点の従業員は、名前は小原小雪（おばら こゆき）。
遥より２歳年下の２１歳・・・。

遥に威嚇するように睨みをきかせてきて、敵意のようなピリリとした空気を感じた。
なんか目つき悪くて可愛くない感じ・・・。
それに、髪の毛に大きなリボン付けてブリッコしてるよ。
豚舎のリーダーは、高橋宏信（たかはし のぶひろ）さん。通称『ノブさん』だ。
４０歳ぐらいで、面倒見の良い優しそうな人だ・・・。

私と同じ年の　松本浩（まつもと ひろし）、通称『ヒロくん』　なかなか爽やかな感じの人だ・・・。

お・・・。茶パツのヤンキーもいる。

１９歳、浦木譲司（うらき じょうじ）、通称『ジョーくん』だ・・・。

「柊遥　と申します。　皆さん、どうぞよろしくお願いします」

ノブが「遥ちゃんだから『ハルちゃん』って呼ぼう。」と言った・・・。

男性軍が「オーッ」とか言って、盛り上がってる・・・。

女性の少ない職場だからね・・・。遥もまんざらでもない。

ヒロが「ここに来る前は、何をしてたんですか？」と質問してきた。

「メビウス電気の事務してました」

「ええっ。メビウス電機って大企業でしょ、何でまたこんな所に・・・」

それを聞いて、竜之介がカチンときた顔をした。

「おいおい・・・。こんな所で悪かったなぁ。遥は自分磨きの為にあえて、ここに転職してきたんだ」

「へえー」

「ほおーっ」

「おおおーっ」

みんなのリアクションが面白い。

赤鬼、いい事言ってくれるじゃん。
結構、気配りの効く人だ・・・。
機転を利かせてくれた竜之介に遥は満足げ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

養豚舎の中は重労働だ・・・。
豚の糞かきに、掃除、消毒、餌やり、水やり、豚のブラシング・・・・。
子豚の世話・・・。
男性軍が気遣ってくれるけど、甘えてられない。
隣で作業していたヒロが、すごく気遣ってくれる。
「ハルちゃん、初日からそんなに頑張ると、次の日筋肉痛で大変だから、程々にね・・・」

「ありがとう。でも大丈夫!!　私って結構力持ちだし持久力あるし・・・」

ここの職場の人たちは結構みんな優しいじゃない・・・。
そう思いながら、楽しく作業してたら、小雪に足をひっかけられて、転んで手をついた・・・。
両手に豚の糞がついた。

「あっ。ごめんね・・・。居るの分からなかった」

「な・・・。何?　この女?」
唖然とする・・・。

「ハルちゃん大丈夫？」
浩が手を持って起こしてくれた。
「うん。大丈夫・・・。どうもありがとう・・・」
しかし性格悪いな、この女・・・。
「ノブさん、ちょっと手を洗ってきます」
「おおっ」
トイレに行って手を洗っていたら、小雪がまたやって来た。
「あんた、生意気なんだよ」
何だ何だ・・・この子、ヤンキー上がりか？
「何が気に入らないわけ？」
「社長の家に寝泊まりして・・・。いい気なもんだ」
「だから？」
「社長にベタベタしないでよ！　じゃないとイビルよ」
「なに？　あなた社長が好きなわけ？」
「ふん。ここの女性従業員は皆、社長の事が好きなんだよ。だから、社長に近付くと、みんなからイビられるからね」
「ばっかみたい。私全然好みじゃないし・・・。勝手に焼きもち焼

いて、くだらない事しないでくれる？　じゃないと私も黙ってないよ・・・」
そう言って彼女の胸ぐらを掴んで、睨みつけた。
「くだらない事してないで、しっかり仕事しろ！　このバーカ！！」

我ながら・・・。自分が恐い・・・。
おおーっ。ここは女囚刑務所か？なんて思った。
こんな小娘なんかに負けるかってーの！！

何事もない顔をして、戻って来て仕事を頑張った・・・。
初めての養豚作業・・・。
結構楽しいかも・・・。

あの小鬼、小雪はそれからずっとムスッとして、デレデレ仕事をしていた。
もっと真面目に仕事しろ、小鬼め！！

夕方ログハウスに戻って来たら、バスルームの扉に、メッセージプレートがぶら下がっていた。
プレートには表と裏に『入浴中』　『空き』　と書かれてる。
お風呂でニアミスを起こさない様に、付けてくれたんだ。

プレートを『入浴中』にして、お風呂に入った後に、聡美に食事を与えて、除湿器を回して洗濯物を乾かしている間に、食堂に行った。

ゲゲゲッ・・・。小鬼がいる・・・。
離れた席に座って、食事をし始めた。
そしたら隣にヒロがやって来た。
「ハルちゃん私服姿になると、何かイメージ違うね」
ちょっとニヤニヤと嬉しそう・・・。

「え？　そうですかぁ？」

「うん。可愛いね」

「またぁ。　Ｔシャツにジーパン姿で、どこが可愛いんですか？」

ケラケラ笑いながら食事をしていたら、ジョーもやって来た。

「ジョーくんのヘアスタイル、凄いね」

「ヤンキーじゃないっすよ。バンドやってるからこんなヘアーなんすよ」

「えーっ。楽器は？」

バンドと聞いて、嬉しくなった。

実は高校時代にバンドを組んでドラムを担当していた。

「エレキギター　っす」

「私ね、高校の時、女の子達だけでバンド組んでたんだよ」

「ええっ？　楽器は何やってたんっすか？」

「なーんだ？」

「ボーカル！！」

「ブブーッ！！　ドラムです」

その話しにジョーが飛びついて目を輝かせる。

「ええーっ。　一緒にバンドやりましょうよ！！」

「良いけど、ギンギンのハードロックは苦手だからなぁ」

「ハードロックじゃないっスよ。ポップス系・・・」

ポップス？！と聞いて、その出立ちとギャップが大きくてちょっとズルッとした。

「えーっ。そのヘアーだから、頭シェイクさせるハードロックかと思った・・・」

「この食堂に、ステージあるでしょ？　あそこ自由に使ってもいいんすよ。後でやりましょうよ」

「いいよ」

食事の後、ジョーと一緒に演奏してみる。

ジョーと同じ年の牛舎担当１９歳、　西沢光（にしざわ ひかる）、通称「ヒカルくん」がキーボード・・・。レストラン従業員の１８歳　、花岡美希（はなおか みき）、通称「ミキティ」がボーカル・・・。

初めて聴く曲ばかりだけど、ちょっと聞いたら何となく上手く合わせられる・・・。

私のドラムにみんな驚いて、大盛り上がりだった。

食堂で食事していた従業員達がみんな盛り上がって踊り出した。

最後の一曲が終ったら、皆スタンディングオベーション状態で、熱気ムンムンだった。

ふと見たら、竜之介もいて拍手していた。

「いやあ、干物すごいじゃん」

「干物？！」
周りが皆「えっ？！」と言う顔をして一斉に遥に注目する。

「もう、こんな所でやめてくださいよ」
空気読め！！！この男は・・・・。

「干物に似てるから、干物なんだよ」

「赤鬼！！」
私が大きな声で、反撃する・・・。

「赤鬼？」
またまた、周りが皆驚く顔をして、こんどは竜之介の方に注目。

「おめえ、従業員のくせに社長に赤鬼はないだろ」

「仕事が終ったら、関係ないしー。干物って言ったら、赤鬼って言うって言ったでしょ・・・」
あっかんべーをする。

周りはみんなこの様子に、ニヤニヤ顔・・・。
二人だけは目と目を見合わせて、ビシバシと火花を散らすのであった・・・。

（第４話に続く）

第3話　養豚場に潜む小鬼（後書き）

この小説は、小説を書き始めた初期の頃の作品なんです。
今思えば文章が今よりもっと未熟だなと感じますが、凄く愛着ある作品なんです。
読者様も読んで楽しんでいただけたら嬉しいのですが・・・。（＊＾＿＾＊）

第４話　素敵な獣医師

あの赤鬼め！！
皆のいる前で”干物”って言うから、皆に知られて、あれから小雪に干物って呼ばれるようになったじゃない！！

「『干物』餌持って来て！！」

「『小鬼』わかった！！」

だから私も『小鬼』って呼んで反撃してる．．．。
相変わらず私達は仲が悪いけど、いびってもめげないヤツだって分かったのか、陰湿な嫌がらせはなくなった．．．。

一輪車に餌を入れて運ぼうとした時、後ろから声をかけられた。

「君、新しく入った子？」

振り返ったら、女性にモテそうな、白衣を着たイケメンな男性が立っていた。
年は３０歳前後？！　穏やかで優しそうで、知的でとってもスマートな感じの人だ．．．。

「あ、はい。初めまして．．．今度ここで働く事になりました柊遥と申します」

「初めまして、僕はここのファームで獣医師をやっている　織田淳也（おだじゅんや）って言います」
遥は、窓辺のカーテンを優しく揺らすそよ風のような．．．爽やか

で素敵な人だなって思った。

「ここにこんな可愛い子が入ったなんて！！　豚舎に来るのか楽しみになったな」

笑顔がまた素敵・・・。

「またぁ」

恥ずかしがりながら、可愛く笑った・・・。

わっ、私、ブリッコしてる？！ちょっと私好みの素敵なお兄さん！！

「仕事には慣れた？」

「はい、大分慣れました」

「重労働で、結構大変でしょ？」

「肉体労働に向いているみたいで、全然平気ですよ！！」

「凄いね・・・。あれ？」

突然何か思い出したような表情をした。

「え？」

「柊さん、昨日食堂でドラム叩いてた子？」

「あ・・・はい」

「いやあ・・・。とても恰好良くて、凄かったよ」

目を輝かせて、真っ白い歯で満面の笑顔・・・。

まっ・・・眩しすぎる・・・！！

「バンド組んでるの？」

「いえ・・・。昔、高校時代に女の子だけでバンドやってた話をしたら、セッションしてみないって話しになって・・・。ちょっと叩いてみただけです」

「えーっ。どこの高校？」

「ユリウス女学院高校です」

「えーっ。あのお嬢様進学校？」

「と・・・とんでもないです。そんなイメージもあるようですけれど、私も含め、庶民だって沢山来てますし、蓋を開けると結構皆元気いっぱいで弾けてましたよ」

話しが弾んでいたら、後ろに仁王立ちする竜之介の姿が・・・。

「おい！干物！！　こんな所でさぼってんじゃねえぞ」

あの赤鬼め・・・。織田さんの前で『干物』って言ったな！！

「は・・・はい。すみません」

謝りながらギロッと睨んで、アイコンタクトで『干物って言うな！！』と威嚇した。

「ごめん、僕が引き止めてつい話し込んじゃって・・・」

申し訳無さそうに、平謝りするその謙虚さがまたいいなぁー。

「いいえ。大丈夫です・・・。それじゃあ失礼します」

可愛い声を作って、満面の笑顔を淳也に送る。

「じゃあまた。後で食堂で・・・」

「あ・・・はい」

淳也は遥に爽かに手を上げてから、竜之介の方にも「じゃ！」みたいにアイコンタクトを送って、子豚のいる豚舎の方に消えていった。

ドキッ！『食堂で・・・』だって・・・。ちょっと、夕方食堂に行くのが楽しみだな・・・。

竜之介は完全に無視状態で、遥は夢見心地で一輪車を転がして出ていった。

「へェー。　あいつ、ユリウス女学院高校出てんだ・・・。お嬢っぽく見えねえな・・・」

遥の後ろ姿を見ながら、竜之介がぽつりと言う・・・。

戻って来たら、小鬼が怒っていた。

「干物遅いじゃん・・・」

「ゴメン　ゴメン・・・」

なんか今日は、いつもよりもパワー全開で力がみなぎるなぁ・・・。

ノブさんや、ヒロくんの目が点になるぐらい、働きまくった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夕方、遥はお風呂に入って洗濯物を取り込んでから、食堂にいそいそと向った。

お盆に今日のメニューからセレクトした晩ご飯を乗せて、空いている席をキョロキョロ探したら、淳也がニッコリと手を降って、隣の席を指さして『こっち』って手招きした。

「先程はどうも・・・」
淳也さんの真向かいの席に座った。

「柊さんって、ハルちゃんって呼ばれてるんでしょ？　僕もそう呼んでいいかな？」
相変わらず笑顔が爽か・・・。

「はい。　あの・・・」

「僕は　淳也でいいよ」

「はい。　淳也さん、食堂に来るの早いですね」

「ハルちゃんに会うの楽しみで、早めに来ちゃったよ」

「えっ？　それは光栄です・・・。」
ちょっと赤面・・・。
何かいい雰囲気・・・　会うの楽しみだって・・・　ウフフ・・・。

これから話しで盛り上がるぞーっ。と思ったら、遥の隣に竜之介がドカッと座った・・・。

「よお、最近こっちで飯食ってるんだ」
竜之介が淳也と親しげに話す・・・・。

「ああ、家で1人は味気なくてね・・・」

淳也が遥の方を見て、竜之介との関係を説明。
「あ・・・。ハルちゃん、コイツとは高校からの友人なんだ」
「えーっ。そうなんですか？　同級生ですか？」
「そう、俺達花の３０歳。ハルちゃんはいくつ？」
「２３歳です」
「まだ若いね。いいなー。青春真っ盛りだ！！」
「そんな事ないですよ。悪い事ばっかりで・・・」
何気なく「ハァーっ」とため息が漏れる・・・。
「何かあるの？」
キョトンとした目で遥を見る。
「ええ・・。色々・・・」
チラッと竜之介を見る。
「若いのに・・・コイツの人生はちょっと今の所悲惨なんだよなぁ」
竜之介が、意味あり気に、チラッと遥を見る・・・。
「えー。何だろう気になるな・・・」
淳也が心配そうな顔で見る。
「食堂で話す様な話題じゃないので・・・」
苦笑した顔の遥。
「よし！後で３人で家で飲もう！！淳也、干物・・・。後で家に来

い」
そう言って竜之介が立ち上がって、手をひらひらさせて、去って行った。

「また干物って言う・・・」
膨れっ面して、ご飯を頬張る遥。

「干物って何？」

「私の事が海岸に干されているアジの干物に似てるらしくて、いつもそう言うんですよ！！」

「えーっ。こんなに可愛いのに・・・」

「そう言ってくれるのは、淳也さんだけですよ！！」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

食事の後、淳也と竜之介のログハウスに行く。

「おーっ。待ってたぞ！」
竜之介が、テーブルにつまみを並べたり、お酒やグラスを並べたり、いそいそと準備を始めていた。
テーブルの上の大皿には、チーズや生ハム、いくら、海老とアボガドの和え物など・・・色々な種類の美味しそうな手作りおつまみクラッカーが綺麗に並んでいた。大きめの洒落たグラスに盛られたナッツ類、フルーツなど、色々所狭しと並んでいる。

「これ赤鬼が作ったの？」
遥が目を丸くして竜之介を見る。

「そうだ驚いたか？　料理得意なんだ！！」
へへン！と得意気な竜之介。

「すごーい。見直した」
目をキラキラと輝かせて、テーブルの上の料理を覗き込む。

「なんか二人とも仲いいな・・・」
2人の会話に割り込めなくて、ちょっと微妙な顔の淳也。

「そ・・・そんな事ないですよ。どちらかって言うと仲悪いんですよね」
ちょっと苦笑いの遥。

「え？　そうか？」
惚ける竜之介。

「いつもビシビシ火花飛び散らせて喧嘩してるじゃない！！」
ちょっと口をとんがらせて、竜之介に突っかかる。

「喧嘩するほど仲がいいんだ」
全然動じずに、にやりと笑う。

「なんですかそれ！！よくいうわ」
プンと拗ねる遥。

「と・・・ところで、さっきの訳ありな話し気になるな・・・」
淳也が興味津々の顔。

「まあ、おまえとおれの仲だからいいか。　話しても良いか？」

竜之介が用意したコップにビールを注ぎながら、遥の方を見る。
「いいですよ。　気にしてませんから・・・」
「実はコイツがここで働くきっかけになったのは、俺が、牧草畑でコイツを拾ったんだ」
「えーっ」
想像もつかない話しに腰を抜かし、驚きまくる淳也。
ー　ー　ー　竜之介は、今までの経緯を淳也に話した。
「なんでも、財布の中に２５００円しかなくて、それで行ける所が夜行バスに乗ってここだったらしく・・・」
「えーっ。酷い話しだね」
竜之介が、遥を見て、
「そうそう、あれから弁護士に相談したりしたが、干物は連帯保証人になってしまってるから、支払い義務が発生するが、相手は闇金業者・・・・。異常な暴利で貸付をしたヤミ金融業者に対しては、利息はもちろん元金も返済する義務はないらしい・・・・。が、うまく事を運ばないと、後々干物に危害を加えられたりしても困ると思ってな。弁護士を含めて、解決に向って話してる所だから・・・・。安心しろ」
「ありがとうございます」
なんかちょっと竜之介大人で、格好良く見えた・・・・。
「１０００万もそんな高額は、返済しなくても済むと思うから」

「良かった・・・」
ホッと胸をなでおろす。

「それから、干物の貯金を盗んだ相手の事は、警察に届けなくて良いのか？」

「あれはいいです」

「えー！！一体なんで？」
竜之介と淳也揃って目が点になる。

「実は高二の時に両親が事故で亡くなって、両親は一人っ子同士で祖父母はすでに他界してて、遠縁の親戚しかいなくて、頼れる身内もいなくて、学費のかかる高校だったし・・・学校辞めようかと思っていた所、その幼なじみの親が学費を払ってくれて・・・家にも呼んでくれて、卒業まで面倒見てくれて・・・とてもご恩があるんです。
そこのおじさんが父と大親友で、お金持ちで、幼い時から親戚みたいなおつきあいではあったのですが・・・。
でも、だからと言って、本当の親戚ではないし、少しでもお返ししないととずっと考えてました。
元々そのとられちゃったお金も、少しでもご恩返ししようと思って貯金していたものなので・・・。彼女の親じゃないけれども、返したと思えば・・・」

「そうだったんかー」
いきなり竜之介にギュッと抱きしめられた。
「干物、おめえは良い娘だな。感動したぞー！！」
グリグリとほお擦りされる。

「きゃっ！！」

「おいおい・・・竜之介・・・」
慌てて、淳也が竜之介を引きはがす。

「もう！　ビックリするじゃないですか」

「いやあ感動しちまって・・・」

「でも、私こそ本当に感謝してます。あの時、もうどうでもいいや！！死んじゃおうかななんて自暴自棄になって、一瞬頭に過ったりもして・・・。あの時拾ってもらわなかったら、どうなってた事か・・・。そう思ったら、何か、赤鬼が神様に見えて来た・・・」

「おいおい・・・。感謝してても赤鬼かい？」

「うん」

「そうそう・・・。1年間タダ働き・・・。あれ冗談だから・・・。そうでも言わないと、どっか消えて自殺しないかって心配になってな。　今月分もちゃんと給料払うから。　立て替えた分は後で金額が分かると思うけど、返済はいつでもいいから」

「えー」
なんだかその言葉に感動してしまって、涙がブワッと目から溢れてきた。

「おいおい。何で泣いてんだよ！」
そのリアクションに驚く竜之介。

「なんか感動しちゃった。凄くいい人ですね」

「おー。そうか？　感動したか？」
目が棒になるぐらいニカッと笑う。

「うん。早く返済出来るように、私ここで、ずっと仕事頑張る！！」

「そんな力まなくて良いよ」

なんだか赤鬼が、凄く格好良く見えて来た・・・。
目が変になったのかな？

「竜之介は本当に良いヤツだな！　今日は感動したよ。　遥ちゃんも健気で偉いよ・・・」
淳也も今の話しに感動しまくってる。

「そうそう・・・。夜逃げしてきてから、アパートに行ってなくて、物凄く気になってるんです・・・。でも、アパートに行くのが恐くて・・・」

「分かる、分かる・・・。恐い目にあったもんな。　俺が行って、アパート解約して来て、荷物こっちに運んでやるよ」

「そんな事まで良いの？」

「俺に任せとけ」

赤鬼って頼れる。

「よし、僕も手伝うよ」

「淳也さんまで・・・。何から何まですみません」

ずっと気になっていた、心の重石がどんどん取り除かれて行くようで、遥は幸せな気持ちでいっぱいだった。

（第５話に続く）

第5話　複雑な三角関係

ーーーーーあれから竜之介と淳也と遥で盛り上がって、酔いつぶれた・・・。

何でも、赤鬼と淳也さんは高校からの友達だけど、科は違うが大学も同じ大学・・・。

赤鬼は、東京帝国農工大学の農学部生物生産学科卒、淳也さんは東京帝国農工大学農学部獣医学科卒・・・。

二人とも国立大卒・・・。驚いた・・・。

特に赤鬼・・・。あんたはそんな風に見えない・・・。

酔いつぶれて、気がついたらベッドの中にいた・・・。

「あれ？」

誰が運んだんだ？

目をこすりながら重い足取りでリビングに行ったら、竜之介がもう起きていた。

「おう！干物起きたか？」

「あれ？ベッドに運んでくれたの赤鬼？」

「おう！　おめえ、酒癖悪いな」

「え？　全然覚えてないよ」

ーーーーーー赤鬼が言う事には・・・。

「おい！赤鬼！！　おまえ、いつも態度が大きいぞ！！図体もでかいがな。生意気なんだよ！！」
そう言って、手に持っていたイカスルメでバンバン赤鬼の頭を叩いたらしい・・・。

「もーっ！！いやんなっちゃうなぁ・・・。コツコツ貯めたお金を盗むなんて・・・。借金残してドロンしちゃって・・・。しずかぁーひどいよぉー。どこいったぁー。逮捕するぞ！！　しずかー。あっ！！みつけたぞぉ。　捕まえたっと。もぉにがさないぞぉー」
そう言って、淳也さんに抱きついて離れなかったらしい・・・。

赤鬼が引きはがそうとしたら、今度は赤鬼に抱きついて、
「あれ？　しずかだぁー。絶対に離さないぞぉー。つーかまえたっと！」

その後・・・。
「なんだ、赤鬼か・・・。こうやって見ると、結構いい男じゃん」と言って、顔を近づけてジーッと見た後に、いきなりキスしてきたとか・・・。

「うそ・うそ・うそ・うそーっ。私がそんな事するわけないわよ。嘘ついてるでしょ・・・」

「嘘なもんか。その証拠に見て見ろ！」
そう言って、洗濯物からごそごそ自分のシャツをとり出して・・・。
「ほれ、このキスマークだらけのシャツを・・・。お気に入りのシャツだったのに・・・。落ちるかなぁ」

もう目が点になって、言葉が出ない・・・。

ショックでクラッと目まいがした。
「ねぇ・・・この悪夢の出来事は、お互いに忘れましょう・・・」
「忘れたくても、おぞましすぎて、忘れられっかなー。自信ねーよ」
「絶対忘れてね。絶対よ!!」
「なるべく」
「いや、絶対だよ。確実にね!!」
「分かったよ。出来るだけ・・・」
「だーかーらー。絶対に忘れてよ!!」
「分かったよ。おめえ、あんなに酔いつぶれたら今日は仕事になんねーだろ。今日は休んでいいぞ。寝てろ。そんじゃあな」
そう言って、竜之介は家を出て行った・・・。
「あいつ。気配りきいて優しいじゃん」
あーでも、赤鬼に私が迫った?! 物凄くショック・・・。
淳也さんに抱きついた?
頭痛くなって来た・・・。ダメだ・・・。シャワーして寝よう・・・。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

昼近くまで寝たら調子も良くなったので、豚舎に行った。

「午前中出れなくてすみませんでした」
チョット恥ずかしくて、バツが悪そうに伏せ目勝ちに謝る。

「ハルちゃん、無理しなくて良いのに」
ヒロが、心配顔・・・。

「風邪でしょ？調子悪い時は、来なくて良いよ。逆に豚に病気移しちゃっても大変だから・・・。特に子豚は・・・」
ノブが言い辛そうに、ちょっと困り顔で言った。

「いえ・・・。あの、じつは・・・風邪じゃなくて・・・」

みんな一斉に声を揃えて・・・。
「二日酔い？」

「はい。申し訳ありませんでした」
何度も深々と頭を下げて、必死で謝る。

「なーんだ。いいよ。いつも頑張ってくれてるし・・・」
大らかなノブ。

「誰と飲んだのよー」
小雪が気になってしょうがない・・・。

「ちょっと、社長と織田さんとね・・・」

「ずるーい！！」
足を踏みならし、物凄く悔しがる小雪・・・。

「分かったよ。今度誘うよ！」

「絶対だよ！！」

「はいはい」

その時、淳也がひょっこりやって来た。

「ハルちゃん、大丈夫なの？」

「あのぉ。昨日は本当に御迷惑おかけしてすみませんでした・・・」

もう穴があったら入りたい・・・。

「気にしないでよ。酔ったハルちゃん、とっても可愛かったよ・・・。それよりも、竜之介が酒癖悪くて・・・。ゴメンね」

「え？」

「もう、油断するとハルちゃんに抱きついてきて・・・。危険だから、ハルちゃんを早めに部屋に連れて行って、後は、二人で飲んでた・・・。と言うか、危険だから、監視してた」

「へ？」

「じゃあ、私が抱きついて、キスしまくってたって話しは・・・」

「え？　そんな事してなかったよ。ちょっと飲んだら、コロンってすぐ寝ちゃって・・・。お酒弱いでしょ？」

「良かった・・・。何か御迷惑おかけしたんじゃないかって、凄く気になってたので・・・」

「ハルちゃんがそんな事するわけないじゃない・・・」

「そうですよね・・・。じゃあ仕事に戻りますね・・・」

くっそう！　赤鬼め！！　自分が酒癖悪かったんじゃないの！！
あいつの事、いいヤツだと思った私が馬鹿だった・・・。
「何がおぞましいだ！！　あいつが私の事を襲おうとしてたんじゃないの」
後でボコしてやるからね。顔洗って待ってな！！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

仕事が終って、ログハウスに戻って来てから、竜之介に昨日の事を問い詰めた。

「赤鬼！！　淳也さんが、昨日、酒癖が悪かったのは赤鬼の方だって言ってたよ。騙したわね！！」

「何言ってんだよ！！　淳也は干物が傷つかない様に、おれのせいにしたんだよ」

「うそー。私をかばった風でもなかったわよ」

「昨日の事思い出してみろ・・・。どこまで覚えてる？」

そう言われてみると自信が無い・・・。

「思い出せないだろ！！」

「でも・・・」

「昨日の事は、おれも悪い夢を見たと思って忘れてやるから、おまえも忘れろ！！」

「なんかスッキリしないけど・・・。まあいいや」
考えても思い出せないし・・・。
もし、赤鬼の言ってる事が真実だったら・・・。恐ろしい・・・。

竜之介と昨日の事で言い争っていたら、ラブ犬の聡美が二人の間を仲裁するかのような感じに、しっぽを振って二人の間にやって来て、寝そべった。

「聡美、晩ご飯の時間だね・・・。今あげるから待っててね」
聡美の頭をなでなでして、ドッグフードの置いてあるダイニングにいった。
その後ろを聡美がくっついていく。

「おー。聡美もすっかり干物になついたな・・・」
その様子を見て嬉しそうにニコニコしながら、遥を目で追う。

「犬は餌をもらえる人になつくんです」

「そうかぁー」

「ねえ、そう言えば・・・。聡美って、ふられた彼女の名前なんでしょ？」
興味津々で、竜之介の表情を伺うように、ダイニングから首だけ伸ばして突っ込みを入れる。

その一言で、コップの牛乳を飲んでいた赤鬼が「ブッ」と吹いた。

「おい！そんな事どっから聞いたんだ？」

「みんな知ってるよ。聞かなくても、教えてくれたし・・・」

「全くみんな暇なやつらめ・・・」

「本当の話しなんだ・・・」

「それはデタラメだ！！」

「犬に聡美なんて名前普通つけないし、いわく付きの犬だと思ったけれど・・・。赤鬼も未練がましくて器小っちゃいな」
餌を器に入れて、床においてから『よしっ！』と号令をかける。

「だから違うって！！」

「いいよ言い訳しなくても・・・。さあ、お風呂に入ってきまーす」
手をひらひらさせて、お風呂の準備に自分の部屋に消えていった。

「おい・・・。話しを聞けって・・・。ちっ。行っちまった・・・」
部屋に消えていった遥の方を見ながら、ちょっとフッとため息を漏らした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

お風呂から上がって、洗濯物を取り込んでいたらインターホンが鳴った。

「はーい」

玄関の扉を開けたら、竜之介と同世代ぐらいの綺麗な女性が立っていた。

「あれ？　あなた誰？　竜之介は？」

竜之介一人だと思っていた家に、見慣れぬ若い女の子が居たのでとても驚いた表情でしげしげと見る。

「はい・・・。私はえーと。ここの家の部屋を間借りしている従業員です。　あの、あなたは？」

「私は、竜之介の友人です。竜之介に『聡美』が来たって言って貰えれば分かりますので・・・」

遥は、でたーっ！！本物の聡美だー！！って心の中でつぶやいた。

「はい。あの今、お風呂に入っているので、どうぞ中で待っていてください・・・」

「はい。じゃあ待たせてもらいますね」

そう言って、彼女は家に上がった。

彼女はストレートの長いロングヘアーをバレッタで後ろにひとつにまとめ、ちょっぴりセクシーだけど知的でハイセンスなカットソーに、真っ白なパンツ姿・・・。それに、スタイルもスーパーモデル並にいい。

仕事の出来る女性って感じだ・・・。

「どうぞ・・・」

彼女をリビングに通して、冷えた麦茶を出した。

それからまた、洗濯物を取り込みに行った。

その姿を見ていた彼女が・・・。

「あなた、洗濯物まで取り込んでて、竜之介のいい人？」
ジロリとした目つきが背中越しに刺さる・・・。

「そんなんじゃありませんよ。掃除・洗濯をするように言われてるんです」

「へえ。そうなんだー」
興味津々な好奇心の顔・・・。

何か居心地悪いな・・・。
早く風呂から上がってこい赤鬼ー。

竜之介がやっと風呂から上がってきた。
「おー、聡美・・・。久し振りだな」

「竜之介、久し振り。元気そうね・・・」

何となく居心地が悪い。
「あの、食堂に行ってきますね」
早々に退散することにした。

なんでなのかちょっと心の中がモヤモヤっとする。
なんでなのかな？疲れててお腹がすきすぎているから？

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

食堂に行ったら、淳也がいた。
「ハルちゃん、ここおいでよ」

「はい」
聡美さんがいると思うと、なんだかおじゃまみたいだし、ログハウスに戻りたくない・・・。
淳也さんとおしゃべりしたり、ステージのドラム叩いたりして時間つぶそう・・・。

「ハルちゃん、ドラムやるんでしょ？」

「今日は、サックス持って来たから一緒に演奏しない？」

ラッキー！！
「えー。サックスやるんですか？」

「うん。大体ジャズなんだけど・・・。一緒に演奏良いかな？」

「はい」

食後、ステージで一緒に演奏・・・。
何だか、食堂がラウンジみたいな雰囲気でいいなぁ。
くーっ。淳也さん超カッコいい・・・。
ちょっとモヤモヤ感が薄れてきた・・・。お腹もいっぱいになったからかな？

演奏を聴きつけて、ジョーや、ヒカル、ミキティもやって来た。
「一緒に演奏いいっすか？」

「おおっ！勿論。なにやろうか？」
相変わらず爽やかな笑顔の淳也。

「映画音楽とかどうですか？」

遥が思いついて提案して見る。

「いいね。じゃあ、ｏｖｅｒ　ｔｈｅ　ｒａｉｎｂｏｗ　なんてどう？」

「それなら私、ボーカルで歌いますね」
ミキティが、マイクの電源を入れる。

息もピッタリで、いい雰囲気・・・・。
音楽を聴きつけて、寮の従業員のみんなが集まってきた。

演奏し終って、拍手喝采・・・。

「淳也さん、サックス上手いですね」

「いや・・・。皆も凄く上手くて、楽しかったよ」

ジョーが、目を輝かせながら、「そう言えば月末に、ファームでサマーフェスタありますけど、皆でやらないッすか？」と提案する。

「わあ！それ賛成！！楽しそうー」
ミキティが手を組み合わせて、祈るポーズで目を輝かせる。

「やろう　やろう・・・」
ヒカルも大乗霧。

「じゃあ早速、演目とかみんなで作戦会議しようか？」
淳也が食堂の椅子を傍から持って来て並べて、手招きでみんなを集める。

「サマーフェスタって？」
1人、遥だけ知らなくて浮いてる・・・。
「あそうか・・・。ハルちゃんは新しく入ったから知らないんだよね。ここの従業員一同で色々と企画・参加して、お客さんと盛り上がろうっていうイベントなんだ。僕は獣医だからここの従業員じゃないけど、毎年参加協力してるんだ」
サックスを布で拭きながら、淳也が言った。
「そうっす。毎年8月の終りの土曜日にやってるっす。バーベキューとか、乳製品や農産物直売とか・・・。バンド演奏とか・・・」
ジョーがコードを抜いたエレキギターを指で弾きながら話した。
「花火大会も行われて、お客さんも結構来ますよー。ヒカル、花火大会結構凄いよね。私、いつも楽しみなんだ」
昨年の光景を思い出しながら目を輝かせるミキティ。
「そうそう・・・。ナイアガラの滝みたいな花火もあるし・・・」
「へえ・・・楽しそうね。　よーし！　皆でサマーフェスタ盛り上げましょうね」
遥も気合いが入る。
「オーッ！！」
みんなで声を合わせて輪になって、手を重ね合わせて気合いを入れる。
淳也が食堂の壁に掛かっている時計を見て・・・。
「お・・・。もうこんな時間だ・・・。ハルちゃん、今日は随分ゆっくりしてるね」

「実は、今、社長の所に元カノが来てて・・・。家に戻りたくないって言うか・・・」

「元カノ？」

「聡美さんって言う方が来てるんですが、社長の恋人だった人って聞きましたけど・・・。その聡美さんが来てるんです」

「ハ・・・ハルちゃん。ちょっと・・・」

その話をした途端、ミキティから手を引っ張られて、部屋の隅に連れて行かれた。

「聡美さんって、淳也さんの元奥さんですよー」

「へ？」

「で・・・。淳也さんと結婚する前までは、社長と付き合っていたらしいです」

「えーっ」

「詳しい事は分かりませんが、複雑な三角関係みたいです」

「そ・・・そうなの？」

うわぁ！！複雑そう・・・。　それに、淳也さんってバツイチで元奥さんが聡美さん？

私、不味い事言っちゃったかな？

（第６話に続く）

第6話　サマーフェスタ

淳也さんが、バツイチだったなんて・・・・。
そうだよね、３０歳になれば結婚ぐらいしてたって当り前だもんね。
しかしその相手が、赤鬼の元カノの聡美さんだなんて！！
あの三人には、色々あったんだろうな・・・・。
そして今も何かあるのかもしれないな・・・・。

つまらない事をついつい想像してしまって、遥はブルブルっと身震いした・・・・。
なんでそんなに気になるのだろう・・・・。
ちょっと動揺と言うか・・・気になって仕方がない・・・・。

聡美さんがまだ居たら嫌だな・・・・。と思いながら、恐る恐る家に帰ってきた。
そうっと玄関の扉を開けたら、聡美さんの靴が無かったのでホッとした・・・・。

戻って来たら、リビングに赤鬼がいた。

「おー。今日は随分と遅かったじゃないか・・・・。気を使ったのか？」

「だって・・・・。元カノが来てたら私はおじゃまでしょうし・・・居辛いし・・・」

「悪かったな・・・・。気ぃ使わせてしまって・・・」

「聡美さんって、淳也さんの奥さんだったんだんですね・・・なん

か三人は複雑な感じですね」

「気になるか？」

案外とあっけらかんと答える竜之介。

「気になるけど、追及したら、プライバシー侵害になりますよね」

動揺を悟られないようにと思いながら、声のトーンが盛り下がってしまう・・・。

「何か、屈折して見られるのも嫌だから、話すよ。そこに座れ・・・」

竜之介の座っている真向かいのソファーを指差し、座るよう促す。

「えーっ。いいですよ・・・。無理しないで下さい・・・」

慌てて両手を横にふって、困り顔の遥。

「いいから。話したいから、聞いてくれ」

ちょっと強引な感じの物言いの竜之介。

「別にいいのに・・・」

口をとんがらがせて、ブツブツとつぶやく。

「早く座れ・・・」

ーーーーー竜之介の話では・・・。

赤鬼と聡美さんは大学時代に知り合って、聡美さんとは科も同じで一緒に勉強した仲間でもあり、確かに大学時代聡美さんから告白されて、デートに誘われて何度か一緒に出掛けた事があったそうだ。

淳也さんともこの頃知りあったそうだ・・・。

赤鬼と聡美さんは、友達以上恋人未満のような凄くあやふやな関係だったそうだ。

聡美さんの父はバイオ研究所の代表取締りでもあり、彼女はその会社の跡継ぎでもあるため、更に勉強を続ける為に大学院に進み、赤鬼は大学院には進まずにファーム事業を始め、事業が軌道に乗るまでは寝る間も惜しむぐらい多忙を極め、だんだん彼女にあう事も無くなり疎遠となり、恋人関係になる前に自然消滅のようにそういったつき合いは終って、その後は友達関係に変化したそうだ。

ファーム事業が軌道に乗り始め、余裕が出来始めた頃から疎遠だった友人関係も少しづつ変化し、聡美さんはファームにも良く遊びにやって来て、時々仕事を手伝ったりする事もあったそうだ。
淳也さんともここで良く会っていたそうで、元々共通の友達でもあったし、だんだん淳也さんと聡美さんの二人は、友情から愛情に変化していったそうで、その後　結婚したそうだ。

離婚の原因は良く分からないらしい・・・。

犬の持ち主は赤鬼だけど、聡美さんが良くファームに来ていた頃、犬の聡美が人間の聡美さんにとっても懐いていたそうで、その頃、聡美さんと恋人関係だった淳也さんがふざけて名付けたのがラブ犬『聡美』の由来らしい・・・。

「・・・と言う事で、この犬の名付け親は俺ではない!!　そして、聡美とはタダの友達だ!!分かったか?」
なんだか凄く力が入った説明のようにも感じた・・・。
そんなに力まなくても・・・。

「ふーん。そうなんだ」
内心ちょっとホッとしたりして・・・なんで？
「どうだ、この話しを聞いて嬉しいか？」
「何で私が喜ばなくちゃいけないの？」
慌てて否定・・・。
「俺に惚れてるんだろ？　誤解が解けて嬉しいだろ」
惚れてるの言葉に、ドキリとした。
「やだー。キモイ・・・。何で私が赤鬼に惚れなくちゃいけないのよ・・・」
「またまた、謙遜して・・・」
「自意識過剰だよ」
「ちぇっ」
「それじゃあ、話しも終ったみたいだし、もう寝ますね。おやすみなさーい」
「なんだ！　もう寝るのか？」
「だってこんな時間だもの・・・。明日も早いし・・・。目がくっついてきた・・・」
「干物はお子ちゃまだな。これから大人の時間だって言うのに・・・」

「全く・・・。遅くまで飲んで酔っぱらっても次の日、いつもと変わらず仕事に行くし、いつも夜遅くまで起きてるし・・・。いつ寝てるんだか・・・。　ゾンビじゃないの・・・」

「げっ。口の悪い娘だな・・・。子供は早く寝ろ」

「はいはい・・・。寝ます。　おじさん、おやすみなさ～い」

「だれが、おじさんだ！！」

竜之介は遥の後ろ姿を見て、優しく微笑んだ。

「口の減らん娘だ・・・」

部屋に戻って、なんだかちょっと嬉しかった・・・。

「聡美さんには未練はないんだ・・・。タダの友達なんだ・・・」

そんな喜んでいる自分に気がつき、何で嬉しいんだろ？　不思議に思った・・・。

まっ。いいっか・・・。寝よう・・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

次の日から毎日食堂で、バンドメンバーと練習や選曲など、忙しい日々を送っていた。

息もピッタリで、演奏や選曲はわりとスムーズにいったが、バンド名がなかなか決まらなかった。

「シェークスピアの真夏の夜の夢からとって『ミッドナイツサマー・ドリーム』なんてどうかな？」

遥がふと思い浮かんで何気なく言ってみた。

「お・・・いいかも」
淳也も乗り気・・・。

「うんうん」
「賛成！！」
「やっと決まったッすね。」
ミキティ、ヒカル、ジョーも賛成する。

「やっと決まったね」

皆でワイワイ談笑していたら、「おー。やってるな」竜之介が偵察に来た。
「どれ、聴かせてよ」

皆でセレクトした曲をメドレーで演奏する。
演奏が終ってから竜之介が、立ち上がって拍手した。
「おー。すばらしいじゃないか・・・。今年のサマーフェスタの目玉はこれにしよう！！」

「竜之介、アンコールの時に一曲演奏してよ」
淳也が、提案・・・。

「えっ？赤鬼って楽器出来るの？」

「いいよ。干物、耳の穴をかっぽじって、よく聴くんだぞ・・・」
ニカリと笑って、得意気な竜之介。

「偉そうに・・・」
口をへの字にして渋顔の遥。

竜之介が舞台後ろにおいてあったピアノの椅子に座り、ピアノの蓋を開けて、ジャズを弾き始めた・・・。
凄く驚いた・・・・ かなり上手い・・・・。
いつもの雰囲気と違って、なんだかちょっと格好良い感じに見える。
何となく自然と皆で、竜之介のピアノに合わせて、演奏し始めた。
ーーーー結局、竜之介はバンドメンバー一員に加わり、一緒に演奏する事になった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

サマーフェスタ当日・・・。
毎年楽しみにしているお客さんも多いらしく、今年は例年よりもファームが賑わっているらしい・・・。
大型観光バスで来る団体のお客さんも多数・・・。
遥はバーベキューコーナーで、小雪とひたすら肉を焼き続けていた・・・。

「暫くお肉食べたくないかも・・・」
遥は肉の匂いにむせ返っていた・・・。
「私は腕が腱鞘炎になりそう・・・」
小雪はふてくされた顔をしている・・・。
いくらテントの下で日よけになっているとは言え、赤く燃える炭の熱風と濛々とした煙で結構キツイ・・・。

豚舎の仕事の方が全然楽かもと思った。
遥も小雪もバテバテ状態だった・・・。

「そこの二人・・・。交代するよ」
「ご苦労様っす」
ヒロとジョーが交代に来てくれた・・・。
倒れる寸前状態だったので、物凄くホッとした。

「良かったー」
小雪と二人で、バーベキューコーナーのテント後方の椅子にへたり込むように座り込んだ・・・。

「そこの二人、ご苦労・・・。これやるよ」
竜之介が、スチロールカップ皿に大盛りのかき氷を二つ持って来た。

「社長、ありがとうございます」
「いただきます」
なんか凄く嬉しい・・・ 砂漠のオアシスのような気持ち・・・。
二人でかき氷を頬張る・・・。
「冷たい!!」

グターッと伸びていたら、淳也が、陣中見舞いにやって来た。
「ハルちゃん、いま休憩中?」

「あ・・・はい」

「じゃあ、ちょっと一緒に回ろうよ」

「はい」
淳也さんと一緒に、イベント会場を回る事にした。

「ふん。何で干物ばかりモテるんだ！！」
不満顔の小雪・・・。

「チェッ。ハルちゃん誘おうと思って、狙ってたのに・・・」
肉を焼きながら横目でその様子を見て、不満顔のヒロ。

「ハルちゃんって、自然体で元気があっていいっすよね。でも、恋のライバルが淳也さんだとかなわないっす」
ジョーもポツリとつぶやいた。

竜之介がヒロとジョーの分のかき氷を持って来て、再び戻って来た。
「あれ？ハルは？」

「淳也さんがさらっていったっす・・・」
何か面白い事が起きるかな？とジョーがニカリと笑う。

「淳也は手が早いなー」
目が点の赤鬼。

「社長もハルちゃんを狙っていたんですか？　ライバル多いな・・・」
ヒロがボソッとつぶやいた。つまんなそうな不満げな顔だ。

「なに？おまえ達・・・」

ヒロとジョーが竜之介の反応に、ニヤニヤ顔・・・。
「社長、早く追いかけないと、とられちゃうっす」
「はい！　早く　行って　行って・・・」

「おい・・・。おまえ達・・・」
指を差して、何か言いかけたが、やめて慌てて出て行った。

「きっと、ハルちゃん追いかけていったんっすね」
「うんうん。相手が淳也さんと、社長じゃあ、俺達の出番ないね」
2人で竜之介の後ろ姿を目で追いながら、売れ残ったもの同士何となく仲間意識を感じた。
「そうっすね」
「肉やけ食いしよう・・・」
お互いに「ハァー」とため息を漏らした。

「キーッ！！何で干物ばかりモテるのよ・・・」
その要すを見ていた小雪は、かき氷やけ食い・・・。

淳也と一緒に回っていたら、聡美とパッタリ会った・・・。

「淳也・・・久し振り・・・」

「ああ・・・」

遥を見て・・・。
「あら？あなたは・・・」

「この間はどうも・・・」

「ちょっと淳也を借りてもいいかしら？」

「何だよ？　大した用じゃないんなら後にしてよ」
せっかくのチャンスを元妻にじゃまされたくない・・・。

「あ・・・私の事は気にしないでください。私、そろそろバーベキューコーナーに戻らないと・・・」

「ハルちゃん。気を使わせちゃってゴメンね」
物凄く申し訳無さそうな淳也。

『気にしないで!!』って淳也にジェスチャーで手を降って、遥は淳也と別れた・・・。

聡美が遥の後ろ姿を見て、
「あの子、ハルちゃんって呼ばれてるんだ・・・。可愛い子ね」

「で・・・。何の用事?」
せっかくのチャンスを台無しにされて、淳也はちょっと迷惑顔。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ーーーーその頃遥は・・・。
「うわぁ・・・。元奥さんが現れて、ドッキリした・・・」
あの美妙な雰囲気の場から早く立ち去りたいと、息を切らして慌てて走って来た。

「おい!!干物!!!」

「ウワッ!」
突然呼び止められて、つい声が上がった。
「その声は・・・。赤鬼!!!」

遥の悲鳴にちょっと怪訝そうな顔をしながら遥をジロリと見た。
「なんだ。淳也と一緒じゃないのか?」

「それが、聡美さんが現れて・・・。淳也さんに話しがあるそうで・・・」

その言葉にちょっと嬉しそうな表情の竜之介・・・。

「ふーん。なんか訳ありかね？　よし、俺が会場案内してやる。来いっ」

竜之介にグイッと手を引っ張られて連れて行かれた。

もうっ！　赤鬼は強引なんだから・・・。

こんな所で遠慮せずに手なんか繋いじゃって・・・。

でも、嫌じゃないな・・・。なんでだろ？ちょっと嬉しい・・・。

ゲームコーナーで、竜之介と一緒に射的をする。

「わぁ・・・。射的なんて、中学校の時以来かも・・・」

結構難しくて当らない・・・。

「干物！！　ヘタッピだなぁ」

あ～あ、やってらんないの様に、頭に手をやる。

「だってかなり久し振りだもん・・・。そういう赤鬼は出来るの？」

「貸してみい」

ヒョイと遥の手から銃をとると、次々と命中させていく・・・。

「すごーい」

「だろう・・・。俺様の凄さを知ったか？」

大きなクマ人形の景品をゲットした竜之介は、遥にポイッと渡した。

「これをおまえにやるよ」

「うわぁ・・・。かわいいーっ。私テディベア好きなんだ。ありがとう」
テディベアにほお擦りして、大喜び・・・。
「もっと欲しかったら、いつでもとってやるぞ！！」
いつも口喧嘩が絶えないのに、赤鬼と一緒だと楽しいな・・・。
「よしっ。次は馬に乗るか？」
「乗った事ないから恐いな・・・」
「大丈夫・・・。教えてやるから・・・」
乗馬コーナにやって来た。
馬の背は、物凄く高い・・・。
「恐いな・・・」
「ビクついちゃダメだぞ！　仲良くしようって思いながら乗らないと・・・」
「うん・・・」
「左足を鐙にかけて・・・。そう。手綱を持って・・・。たてがみを掴んで・・・。鬣は強く握っても痛がらないから大丈夫だ！！」
「わあ乗れた・・・」
「油断するな・・・」

赤鬼の言われるように乗ったら、上手く乗れた・・・。
赤鬼って何でも出来るんだな・・・。
見た目そんな風味にえないけど・・・。

「あれって、竜之介とハルちゃんて子じゃない？」
仲良く馬に乗る姿を、聡美と淳也が見つけた・・・。
「ああ・・・」

「あの子って、竜之介と親しいみたいだけど、一体・・・」

「おまえは、深入りするな・・・」
元妻・・・聡美の気性は十分知ってるだけに、淳也は嫌な予感がした。

「なんか妬けちゃうな・・・」

「おまえには関係ないだろ・・・」

「あら、お互いにバツイチで、もうフリーなんだから、自由恋愛してもいいんだし・・・。あなたはハルちゃんと、私は竜之介と・・・」

「竜之介とはとっくの昔に終っただろう・・・」

「一度終っても、またスタートさせられる可能性だってあるわよ」

「おまえってヤツは・・・」

「あなたもハルちゃんを狙ってるんでしょ？　お互いに持ちつ持た

れつね・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夜になって、バンド演奏が始まった・・・。

今日一日で、前よりももっと赤鬼と気持ちが通じるようになった気がする・・・。

赤鬼のピアノを弾く姿・・・。結構カッコいいかも・・・。

ミキティのボーカルも冴えてる・・・。

ヒカルくんのバスキーボードいいね。

淳也さんのサックス・・・。大人の色気を感じるな・・・。

素敵・・・。

ジョーくんのギターは、エネルギッシュでナイスだね！！

バンド『ミッドナイツサマー・ドリーム』は大盛況だった。

アンコール曲の最後に、花火大会が始まり、雰囲気を盛り上げる・・・。

そして、サマーフェスタを終え、皆で寮前の広場でガーデンテーブルを並べ打ち上げ会・・・。

「おい干物！　今日は酒　控えろよ」

「もう、赤鬼それを言わないで・・・」

「なんっすか？何かあるんっすか？」
ジョーが興味津々・・・。
「コイツはな、酔っぱらうとキス魔に変身するんだ・・・」
「えーっ。それいいな。酔わせよう・・・」
ヒカルが大喜び・・・。
「ハルちゃん意外ー。そうなんだ・・・」
ミキティが驚きの目で遥を見る。
「やだぁ。ミキティまで・・・。　そんな酷くないって・・・」
もう恥ずかしすぎて穴があったら入りたい気分・・・。
「そうだよ、そんな事ないよ」
淳也が優しくフォロー。
「淳也、コイツの為にならない。真実を教えてやったほうがコイツの身の為だ・・・」
淳也さんのせっかくのフォローを無駄にするか！！赤鬼め・・・。
「もぅ。分かりました自覚します・・・。今日はジュースにしよう・・・」
「で、キス魔って事は・・・。ハルちゃんは・・・社長と淳也さんに？！」
ヒカルが三人の顔を代わる代わる見る。
「全然全く覚えてないよー！！そんなの嘘だー！！」

遥が顔を手で覆った。

皆が盛り上がっている所で、聡美が現れた。

「あら、盛り上がってるわね。私もお邪魔していいかしら？」

（第７話に続く）

第6話　サマーフェスタ（後書き）

しみじみ表現力無いなぁと思うのですが・・・　初期の頃の作品ですのでお許し下さいませ・・・。（^__^;）

第7話　今度は四角関係？

バンドのメンバーと打ち上げの時に、聡美がひょっこり現れた。
「楽しそうね。私もご一緒させてもらってもいいかしら・・・」
一瞬沈黙が起きた・・・。
「かまわねえけどよ。酒飲んだら車運転できねえし、田舎だからなかなかタクシーつかまんねえし、運転代行も来ないし・・・。ジュースにしとけよ」
竜之介が困り顔で聡美に言い聞かせるように言った。
「竜之介ん家、泊めてよ」
挑発的な表情で甘えるような声を出し、誘惑モードの聡美。
積極的な聡美の言葉に、何故だかちょっと遥の心の中がザワッと騒めく。
「うちはダメだ。今、居候がいるし・・・。泊めらんねえ」
竜之介の言葉にホッと安堵した。
「冷たいのね」
ちょっと拗ねる聡美。
「アルコールは飲むな、ちゃんと家に帰んだぞ」
キッパリと断る竜之介の男らしさに、遥の心が風に揺れるロウソクの炎のように、何故だかゆらゆらっとした。
ーーーーー赤鬼ってきっぱりしてるんだなぁ・・・。
聡美とのやりとりに、遥は、ちょっと嬉しいような心の中がスッキ

リしたような気持ち。

だが、聡美は竜之介の言葉には動じず、机の上にあった誰かの飲みかけのビールグラスを手にとって、ぐいっと飲み干した。

「これでもう家に帰れないわ」

上目遣いであからさまに誘惑モード・・・。

「おい、聡美！！」

ちょっと怒った感じの竜之介。

うわおーっ。聡美さんって、ずいぶん積極的な人なんだ・・・。

遥は呆気にとられる・・・。

「僕はまだ飲んでないから、聡美を送って行くよ」

淳也が聡美の腕を掴んだ。

「バンドメンバーの打ち上げなんだから、場をわきまえろよ。白けさせるような事するなよ・・・。さ・・・ 行くぞ」

聡美がキッと淳也を睨みつける・・・。

「さ・・・ 来い」

そんな事にはお構いナシで、聡美の手を掴んだ。

「んっ・・・ もうーっ」

淳也に無理矢理引っ張られるようにして、聡美は帰って行った・・・。

他のメンバーは皆、呆気にとられて、シンとした・・・。

「それじゃあ、仕切り直しますか・・・」

場を盛り上げようと、ヒカルが一生懸命・・・。

「う・・・うん。そうだね。乾杯しよう！！」
コップを持って、遥も無理矢理笑を作る・・・。

「干物はジュースだぞ！！」
そんな遥に、竜之介が茶々を入れる。

「分かってるわよ。赤鬼おまえは小鼻か？　何度もしつこいって・・・」
プーッとほっぺを膨らませて、竜之介に拗ねて見せる。

「おー。ハルちゃんの毒舌が炸裂っす」

「皆、同情するだろ・・・。俺は毎日干物にいじめられてるんだ・・・」
ニカッと笑って、遥の頭をクシャクシャっとする。

「なんて事を！！いじめられてるのは私なんだからーっ！！」
下から上目遣いで、竜之介を睨みつける遥。

「まあまあ・・皆で乾杯しましょう！！」
意外と落ち着いてて、大人なミキティ。

ーーーーその後は、また話しが盛り上がって、楽しめたけど・・・。
あのまま淳也さんは戻って来なかった・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝、養豚場で淳也さんと会った・・・。
遥を見かけたら、爽かな笑顔を向けて、手を上げた。
「やあ、昨日はどうも・・・」
持っていた一輪車を置いて、すまなそうに謝る遥。
「何か、私達だけで楽しんでしまって、ごめんなさい」
「謝る事ないよ。聡美の事で、雰囲気壊しちゃってゴメンね」
ポリポリと頭を掻いて、恥ずかしそうに照れる淳也。
「淳也さんのせいじゃないし、そんな謝らないでくださいよ」
「一応、元妻だから・・・」
「そんなぁ・・・淳也さんが責任感じる事ないですよ」
「そう思ってくれる？」
遥の言葉にちょっと嬉しそうに優しく微笑む。
「はい」
遥もニッコリ笑った。
「聡美はメチャメチャ勉強が出来て、頭は切れるけど、お嬢様育ちで我が儘で、常識外れな所もあるし・・・。自分中心にしか物事を考えなくて、人を降り回すから・・・。もしかしたら、これからハルちゃんも嫌な目に会わせられる事が起きる事があるかもしれないけど、そう言う奴だって思って、出来るだけ気にしないようにしてね。気がついたら僕が諌めるし、困った時には何でも相談してくれて構わないからさ」

「ありがとうございます。でも、私は大丈夫ですから・・・。
そんな気にしないでくださいね。昨日は気遣って下さって、一生懸命場を取り持って下さって、すみませんでした。
本当にありがとうございます」

「そう言って貰えて、嬉しいよ」

二人で笑い合う。

「そうそう・・・。もし嫌じゃなかったらだけど・・・。今度一緒にイングリッシュガーデンにいかない？」

「え？」

「この近くに有名なイングリッシュガーデンがあるんだ・・・」

「わぁ。いいんですか？　一度行ってみたいなって思ってたんです。あ・・・でも・・・２人でですか？」

「そんな重苦しく考えないでよ。デートの誘いって言うわけじゃなくてさ、友達というか・・・。そんな意味での誘いだからさ・・・」
淳也の心の内は、ちょっとデートの誘いっぽい気持ちもあったが、年も離れた若い純真な遥・・・バツイチという負い目もあったし、まずは友達としてと思った。

「はい・・・じゃあ・・・。よろしくお願いします。

「わっ。本当？　良かった・・・。行く日はハルちゃんの都合の良い日に合わせるから・・・」

「ありがとうございます」

「楽しみにしてるね」

「私も楽しみにしてます」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夕食も終え、ログハウスに戻って来たら、リビングに竜之介とラブ犬の聡美がソファーに仲良く並んで、テレビを見てた。

「何見てるの？」

「サマーフェスタのライブのビデオだ。見るか？」

「わぁ。見たい　見たい・・・」

「なかなか良くとれてるぞ・・・」

「そう言えば、赤鬼ってピアノがプロ並に上手で驚いたよ」

「そうか？それは褒めすぎだろ・・・。俺はこう見えてもお坊ちゃま育ちなんだぞ。だから、子供の頃は色々習い事をやらされててな。ピアノもそうだ・・・。でも、ピアノは好きだったなぁ」

「え？お坊ちゃま育ちなの？　全然見えないよ」

お坊ちゃまだったなんて・・・ちょっと意外な感じがした。

すごくワイルドで逞しくて、ひ弱な感じには見えないし・・・。

「だろう・・・。自分の思い通りにさせようとする親に反発し続け

てな、ついに勘当となったんだ」

「うわっ。そうなんだ・・・。親には会ってないの」

「そうだな・・・。かれこれ8年近く会ってないか・・・。最後は生前財産分与だって金もらって、縁切られた。
で・・・それを元手にファーム事業を立ち上げてだな・・・あの時の数十倍・・・イヤもっとかな・・・財をなしたと言うわけだ。
すごいか？」
その時今まで見た事が無い表情と言うか、少し遠い目をした。
本当は御両親や御家族に会いたいんじゃないの？

「とても凄いけれど・・・でも、贅沢だよ。親がいるのに・・・
仲直りの努力しないと・・・」

「そうだな。干物の親の事聞いていいか？」

「いいよ」

「何で亡くなったんだ」

「あれは、高2の夏だったなぁ・・・。　うちの両親は夫婦仲が良くて、私が部活とか、友達と遊びに出かけて家を空ける時に時々2人でデートに出掛けてた・・・。で、その日も山梨の山へドライブに出かけてね。急にタヌキが道路に飛び出してきて、慌ててハンドルを切ってしまったらしく・・・。ちょうど両親の後方を走っていた車が目撃してててね・・・。
崖から落ちてしまって・・・。私が病院に駆けつけた時にはもうダメだった・・・。即死に近い状態だったらしい・・・。
でもね、本当に仲良かったから、一緒に天国に旅立てて、ちょっと

心の救いになってる。もう私が見てるのが恥ずかしいぐらい仲良しだったから・・・」

「そうか・・・」

「両親が亡くなって、社宅だったから家を出なくてはいけなくて、うちって親戚が少なくてね・・・これと言って頼る親戚もなくて困っている時に、静香の両親が何かと助けてくれて・・・。静香のお父さんと、うちの父は大親友だったの。
だから幼い時から家族同士仲良くて、私小さな時は親戚だって思い込んでて、おじちゃん、おばちゃんって甘えていたし・・・静香も従姉妹だって思ってたの。
困っている私を家に呼んでくれて、学費まで出してくれて・・・。もう一人娘が出来たって思ってるから、学費とか返さなくていいし、負い目に思う事も無いからネって言って下さって・・・本当に感謝してるんだ。　だから、静香に騙された事も、あまり恨んでないよ。
赤鬼が助けてくれたし・・・」

「いいやつだなおまえ」
優しい目で見つめられてちょっとドキッとした。

「ねえ、でも、何で見知らぬ私を助けてくれたの？」

「俺もわかんねえが、ほっとけなくてな。気がついたらこのとおりだ」

「本当にいい人だね」

「そうだろ　そうだろ・・・。俺に足を向けて寝れないだろ」

「また出た・・・。これがなかったら、好感度もっとUPなんだけどな・・・」

「この性格は直んねえな」

「でも、とても感謝してます。ありがとう」
ペコリと頭を下げた。

「おお。素直だと可愛いなおまえ」

「え？そう？」

お互いに、目と目を見交わして沈黙が続く・・・。
竜之介の愛しそうな優しい目に、心が吸い込まれそうな気持ちがした。
遥がハッと我に返って・・・。

「あ・・・。そうだ。　淳也さんにイングリッシュガーデンに行こうって誘われたんだ。　私行ったことなくて、ずっと行ってみたかったの。赤鬼は行った事ある？」

「近所だし、何度も行ってるぞ。　淳也とデートするのか？」
ちょっと目がつり目のように怒った顔にも見える。

「デートって、そんなんじゃないよ。　ただ一緒に遊びに行くだけだって・・・」

「それをデートって言うんじゃないか？」
なんだが声のトーンが上がってない？

「違うって、淳也さんとは何でもないし・・・淳也さんも友達として誘ってるって言ってたし・・・」

「でも、あっちはそのつもりだと思うぞ・・・」

真剣な表情の竜之介。

「え？　まさか・・・」

そんな顔でみられると、疚しいような気持ちにもなって来るし・・・淳也さんと2人はやっぱり良くない事かなと思えて来て心細くなってきた・・・。

「俺も行こうかな」

名案が浮かんだように、ニカッとした。

「別に良いけど・・・」

ちょっと安心な気分・・・。

「でも、淳也が嫌がるな・・・」

遥のその表情を察知して、わざと意地悪く焦らす。

「そんなことないでしょ。淳也さんに皆も誘おうって言ってみよう・・・」

そんな事も気付かずに、慌てて話を進める遥・・・。

淳也に皆も誘って行きませんか？と聞いてみたら、一瞬変な顔をしたけれど、快く許諾してくれて、バンドメンバーに声をかけてみたが、結局、休日が会わず、淳也と、竜之介と、そして何故か聡美も一緒の4人で行く事になった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「なんだかこうやって男女４人で出かけると、ダブルデートみたいね」
一番はしゃいでる聡美・・・。
「なんでおめえがくっついてきたんだ・・・」
ウザがる竜之介。
「ちょっと小耳にはさんでね、淳也に頼みこんで無理矢理ついて来ちゃった。私と竜之介、ハルちゃんと淳也で行動しましょうよ！」
「何で俺がおめえなんだ・・・。俺は干物とペアだ。　淳也が連れて来たんだから、淳也が面倒見ろ！」
「別れた妻と一緒に行動なんて嫌だよ。聡美の目的はお前だから、面倒見てやってくれ・・・」
淳也も聡美と一緒はゴメンとうっとおしがり、困り顔・・・。
ーーーーー淳也め！　俺と干物を引き離す作戦だな・・・。
竜之介が横目で淳也をチラりと見た。
「ねえ、ハルちゃんは竜之介と淳也とどっちが好み？」
面白そうに興味津々な表情で目を輝かせ、聡美が遥に質問した。
本当に聡美さんは言う事がストレートだな・・・。
「えっ。いきなりそんな事言われても・・・。何も考えてなかったし・・・」
「じゃあ今決めて」
決めてって言われても・・・。なんて答えたらいいの～？

「今決める問題じゃないと思うし・・・。皆一緒に行動しましょうよ。それが一番丸く収まるかと・・・・」
苦し紛れに、思いついた事を早口で言った。

「干物、いい事言うじゃん。そうしようぜ」
ニヤリとする竜之介・・・。

「そうしましょう・・・」
赤鬼の助っ人助かった・・・。苦笑する遥・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

イングリッシュガーデンは広大で、とても綺麗に整備されてて凄く素敵だ。
平日なのに、結構人も来ていて賑わっている。

素敵な素焼きの鉢に寄せ植えされたコンテが並べられてて、美しい花のアーチや、見た事の無い木や花・・・。
池に浮かぶ睡蓮・・・美しい背景の一部のようにオシャレなベンチやテーブルが置かれてて・・・。
可愛いガーデンハウスや洋館もある。
「うわぁ。思った以上に素敵・・・」
遥は目を輝かせて、うっとり・・・。

「ほれ、逸れそうだから・・・。」
そう言って、竜之介が手を繋いだ。

「うん」
サマーフェスタでも手を繋いだっけ・・・。

赤鬼の手って、大きくてゴツゴツしてるけど、なんか癒される手って言うか・・・。繋がれると嬉しいな。

「あの二人をまくぞ・・・」

竜之介がボソボソっと小声で遥に耳打ちした。

「え？」

竜之介は、遥の手を引いて、植木で作った巨大迷路にサッサと入っていった。

「ウザイのをまくにはこれが一番・・・」

人が結構来てたのに、巨大迷路の中は誰もいない・・・。

「おい、干物・・・。　おまえ、淳也の事、どう思ってるんだ？」

ドキッ！！いきなりその質問？

突然向かい合わせにさせられ、両肩に手を置かれて、真顔の竜之介・・・。

「どうって？」

心臓がドキドキ・・・。

「淳也はお前の事、好きなんだと思う・・・」

「私は素敵な人だなって思ったけれど、恋とか愛とかそう言う事は考えた事がなかったかも・・・。今は、良いお友達っていう気持ちだと思う」

「あやふやな態度はかえって本人を傷つけるから、良くないぞ。おまえ、恋愛経験ゼロか？」

その一言はちょっとショック・・・確かにそうです・・・。

「女子高だったし、会社勤めの頃は、貯金する為に節約してあまり遊ばなかったし、出会いがなかったし・・・。恋愛する機会も時間も無かったし、確かにゼロだよ・・・」

ちょっと肩を落とし、恥ずかしげにうつむく。

「お前に聞きたい事がある」

「なに？」

「正直に言ってくれ。　俺の事どう思ってる？」

「一緒にいると楽しい人だって思うよ」

「手を繋がれた時、どう思った？」

「癒される気持ちって言うか・・・。嬉しかったかも」

「おい。それは、俺の事が好きって事じゃないか？」

「うん。嫌いじゃないよ」

「普通、好きでもない男からいきなり手を繋がれたら女性ってもんは拒否するものだぞ」

「へぇ。そうなんだ・・・。知らなかった」

そうなんだ・・・そうなの？

「知らなかったって・・・。おい・・・」

「恋愛対象として考えたら、どう思う？」

「考えた事なかったから・・・」

そんな事いきなり言われても・・・。

「うーん。じゃあ、こうやったら、どんな気持ちになる？」

そいうといきなり、竜之介がギュッと遥を抱きしめた。

「え？」

「どう思う・・・」

「なんか、心臓がドキドキして、嬉しいような、恥ずかしいような・・・」

イヤじゃないって思った・・・逆に心地よいって言うか・・・。

「それは俺の事を恋愛対象として、好きって思ってる事じゃないか？」

「え？　ま・・・まさか！！」

これが恋なの？！

「お前って奴は・・・。全く・・・。キスしても良いか？」

そう言って迫ってくる竜之介・・・。

「な・・・何をいきなり・・・」

ハードル高すぎます！！ど・・・ど・・・どうしよう・・・。

赤鬼が突然遥のくちびるにチュッ！とキスした。

ほんの一瞬の出来事・・・。

真っ赤になって、目が点の遥・・・。

「俺、お前の事が好きだ。愛してる・・・」

そのまま固まって、フリーズしたままの遥・・・。

「おい。聞いてるか？」

「う・・・うん」

「俺の気持ちの答えは？」

「私・・・私・・・も・・・　好き・・・」

「それは、友情じゃなくて、愛の意味の　好き？」

「うん」

「良かったー。実は、淳也に先越されないかと　かなり焦ってた・・・。　もう一度、キスしてもいい？」

遥がこっくりとうなづいた。

今度はもっと深く優しく・・・。

「今度からお前の事を　愛情込めて　”ルカ”って呼ぼうかな？」

「うんいいよ。私は”リュウ”って呼ぼうかな？」

「いいよ！！」

見つめ合って、微笑み合う二人・・・。

巨大迷路から出てきた遥と竜之介を見つけて、慌ててかけよる淳也と聡美にニカッと笑って、竜之介が言った。

「さっき、告白してＯＫもらったぞ。　俺達、今日から恋人同士なんで・・・。この後の予定だけど、二人で回るから、よろしく・・・」

ガックリ肩を落とす淳也と、悔しがる聡美・・・。

この二人の今後の展開は？

（第８話に続く）

第8話　初デート

ーーーーあれから今まで住んでいた東京のアパートは解約して、リュウと一緒に荷物をトラックに積めて、ここまで持って来た。凄く質素な生活をしていたので、大した荷物はないし、古い家具は向こうで殆ど処分した・・・。

帰りのトラックの中、リュウとおしゃべりしながら、蓼科へと向っていた。

「ルカは質素な生活してたんだな・・・」

「うん。静香の両親に出してもらった学費とお世話になった生活費を少しでも返したいと思って、貯めてたから・・・」

「遊びたい年頃なのに・・・」

ちょっと淋しそうなリュウの横顔・・・私の事で心傷めてくれてるの？

でもね・・・。

「そんな顔しないで・・・切り詰めても、楽しめる場所って探せば色々あるから・・・辛いなんて思ってなかったよ」

「え・・・例えば？」

「会社の保養施設のテニスコートやプールで、汗流したり・・・。おにぎり持って名所散策とか・・・。図書館行ったり・・・。区民

センターのサークルにも入ってたし・・・。サイクリングしたり・・・」

「賢い主婦になれそうだな」

「それ、褒めてるのか、貶してるのか・・・」

「褒めてんだよ」

「そうそう・・・。闇金の件だけど・・・」

「あれはバッチリ解決したから安心しろ」

「で・・・。いくらになった？」

「それはいいから・・・」

「良くないって！！少しづつになるけど返すから・・・」

「いいって。結納金の中から差し引いておくから・・・」

突拍子もないその発言に驚きを隠せない・・・。

私達つきあい始めたばかりなのに・・・。

「それって話しが飛躍しすぎ・・・。プロポーズもされてないし・・・。リュウと結婚するか分からないし・・・」

「え？　結婚しないの？」

「そう言うわけじゃないけど・・・。まだつき合い始めたばかりだよ」

「いいじゃん。交際期間をワープして、早く結婚しようぜ！」

「それって、プロポーズ？」

「おお！」

「嫌だなー」

苦虫をかみつぶした顔の遥。

「な・・・なにい？！」

凄く慌てふためくリュウの顔が可笑しい・・・。

「リュウがいやなんじゃなくて、こんなトラックの中でプロポースは全然ロマンティックじゃないし・・・」

「おお！　そう言う意味か・・・。　いや、焦ったぜ・・・。じゃあ、ルカはどんなプロポーズがいいの？」

「そう言われても・・・。トラックの中は嫌だな・・・」

どんなプロポーズだなんて・・・全くそんな事考えもしなかったよ・・・。

「よし！わかった・・・。思いきりロマンティックなプロポースにしてやる」

「なんか気が早いな・・・」

「俺、実は結婚願望強いの」

「でもさ、初めて出会った時、全然俺のタイプじゃないって言わなかったっけ？」

「ああ、あれ？　嘘・・・」

アッサリと言われてカクッとした。

「え？」

「初めてルカを見た時、可愛い子じゃないかって胸ドキュン！だったけど、　ルカみたいなタイプの子は、慎重にしないと逃げられそうだって思って・・・。気のないそぶりして、ずっとルカを狙ってた・・・」

「なんかそれストーカーっぽくて、キモイ・・・」

益々苦々しい顔の遥。

「な・・・。キモイだと・・・」

「キモイよー」

「ちぇっ・・・」

「でも・・・私みたいなタイプを手なずけるのに、どんな作戦だったのかしら？」

「俺さー。ファームでいつも生き物扱ってるだろ？　そう言うの得意なんだよなぁ。人間だって生き物だから・・・心を開いて敵じゃないって慣れさせて、じわりじわりと少しづつ歩み寄ってさ・・・。至近距離まで近付いたら捕獲する・・・」

「ねぇー。それって・・・豚舎の豚っぽくない？　私って豚？」
「かわいいじゃんか・・・。あんな愛らしい・・・」
「なんか・・・微妙・・・」
「ガハハハ・・・気にすんな！褒め言葉だって！！」
「うーん」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

蓼科のログハウスに帰ってきて、荷物の整理・・・。
「おまえ、初めてここに来た時も何も持ってなかったけど、本当に荷物少ないな・・・。女の子なのに服もこれだけか？」
またまた淋しそうな表情のリュウ・・・。
「うん」
「そう言えば、初めてここに来た時、買ってやった服どうした？」
「あ、あれ？　クローゼットの中でずっと眠ってる・・・」
「何で着ないんだ？」
唖然として驚くリュウ・・・。
「だって、豚舎の仕事でしょ？　休日もこんな田舎だと着て行く場所ないし・・・」

「確かに・・・。よし！　デートしよう！！　思いきり可愛くするんだぞ！！」

「どこいくの？」

目が輝く遥・・・。

デートなんて初めて・・・。

「とこに行きたい？」

「東京魔法ランドとか東京海賊ランドに行きたいなぁ」

「よし！思い切って、東京海賊ランドのホテルマラコスカに泊まるか？」

「えーっ。楽しそう・・・」

「スイートでも予約するか・・・。」

「いいって。そんな事にお金使うの勿体ないから・・・」

「遠慮するなって！！」

「要らないって！！　スタンダードで十分・・・」

「遠慮深いな・・・」

「そうだ・・・。結婚前の乙女なんだから、襲わないでよ！！」

「え？　ダメなの？」

「ダメ！！　そう言うのは、結婚してから・・・」
「チェッ・・・。じゃ早く結婚しようよ・・・」
「まだまだ・・・」
「つまんない」
「何甘えてんの！　狼に変身したら血を見るよ！！」
「きょわい・・・」
「なんかキャラ変わってない？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

竜之介と初めてのデート・・・。
と言うか、遥にとって、人生生まれて初めてのデート。

昨日は嬉しくて、ドキドキ・・・・。
何着ようか？あれこれ迷って・・・・。
『恋人が出来るとこんな気分なんだ・・・。なんだか世の中全てのものが新鮮で輝いてる感じ・・・』

リュウが可愛くしろって言うから、いつもガッシリ後ろでひとつに縛っているロングヘアーをカールして、可愛いシュシュでサイドにまとめてみた。
いつも日焼け対策程度の薄化粧だけど、今日は可愛くメイク・・・。
頬は薄ピンクにまあるくチークをつけて・・・。
目元はちょっとキラキラメイク・・・。

くちびるはグロスでちょっぴり色っぽく・・・。
ワンピースなんてかなり久し振り・・・。
自分の姿を鏡に写してくるりと回ってみる・・・。
オシャレすると、私もそれなりに見えるかな？
鏡の前で、ニコッと笑ってみる・・・。
「あほらしい・・・・」
浮かれすぎてない？　落ち着け遥・・・。
「おまたせ・・・」
リビングに行くと、いつもラフな格好の竜之介が、今日はメンズファッション雑誌から抜け出たみたいに格好良くなってる・・・。
振り返って遥を見た竜之介の顔が驚きの表情に・・・。
「いやぁー。オシャレすると凄く可愛いじゃん。惚れ直した・・・」
「リュウも素敵・・・。こんなにいい男だった？」
「お嬢さん、お手をどうぞ・・・」
「私、デートなんて初めてで、心臓ドキドキ・・・」
「今日は思い切り楽しく過ごそうな」
「うん」
ログハウスから出てきた二人を見て、ファームの皆が「え？」何度も見返していた・・・。
「そのメンズ雑誌から飛び出したような格好良い人は、もしかして

社長っすか？」
驚愕の表情のジョー。

「おう」

「今日はまたファッション雑誌から出てきたみたいっすね。カッコいいっす」
バンドのステージ衣装に使えないかと、竜之介の服装を舐める用に観察する。

「本当に・・・。社長カッコいい・・・」
ヒロも竜之介のファッションに興味津々。

「この美女は、社長の彼女っすか？」

「凄く可愛いー。こんな可愛い子どこで見つけてきたんですか？」

「東京もんでしょ？こんな田舎にはこんなタイプの子はいないよ・・・」

「おい！　お前ら良く見ろ！！　遥だよ！！」
竜之介が笑いながら言った。

「え？」
「お？」
「あ・・・。」
「うそーっ。」
みんなビックリ仰天・・・。

「やだなもう皆・・・。私よー」

遥が照れ笑い・・・。

「ルカ、みんな目がハートだ・・・。危なそうだ・・・。早めに退散するか・・・」

竜之介が遥の手をぐいと引っ張る。

「社長ずるいっす」

「そうだ、そうだ・・・。　独占禁止！！」

「社長だからって、独り占めはひどいぞ」

「うるさーい。ルカは俺のもんだ！！　ははは・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

２ＤＡＹパスポートにして、今日は魔法ランド、明日は海賊ランドにした。

「高校の時にお友達と何度か遊びに来たけど、デートで来るのっていいね。並びながら、楽しそうなアベックを見るといいなーって思って・・・。いつか私も恋人と一緒に来てみたいなって憧れてたの」

「そうかー。夢が叶って良かった！」

「リュウは恋愛経験豊富そうだし、何度も彼女と来たんでしょ？」

「まあ、何度かはな・・・。妬けるか？」

「うん、ちょっとね。　聡美さんとも来たんでしょ」

「１度あったかな・・・。でも、あんな性格だからすぐにポシャっ

た・・・」

「ふられたの？」

「どうだったかな・・・」

「ふったんだ」

「その可能性もあるな・・・」

「ふーん」

「おい！　折角のデートなんだからそんなつまらない話やめようぜ」

「はい　はい・・・。あこれかわいいー。欲しいー」

ワゴンに並んでいるテディベアに目をハートにさせる。

「お前、ベアが好きだな」

「うん」

「よし、買ってやるぞ！！」

「わーい！！買ってくれるの？嬉しいな・・・」

「おう、１０個ぐらい要るか？」

「小さいの１コでいいって・・・」

苦笑する遥。

「遠慮深いなぁ」
お金を払って、包みを遥に渡す。
「ありがとう。大切にするね・・・」
遥の嬉しそうな顔に竜之介もにんまり・・・。

―――「すいませーん。」ってお願いして、二人の写真を撮って貰うのもすごく新鮮。

―――手を繋いだり、リュウの大きな手で肩を抱かれたりして歩くのもとても楽しい。

―――リュウって本当に嫌な所がなくて・・・。知れば知るほどいい奴って思う。

「なぁ。初めてのデートはどうだ?」
「うん、最高!! 楽しいー」
「良かった!! 俺も最高!!」
夕方ホテルにチェックイン。
「スタンダードでいいって言ったのに、スィートにしたんだ・・・。お金が勿体ないよー」
「全くお前は、生まれながらに質素な性格してるな」

「リュウこそ、お坊ちゃま育ちで、金遣い荒くて・・・」

「普段は質素だぞ！！」

「そうお？」

「おい、喧嘩しに来たんじゃないぞ！！」

「そうだったね。ごめん。貧乏人の雄叫びだと思って聞き流して・・・」

「お前って、すぐに憎まれ口叩くけど、素直でかわいい奴だな」

目と目を見交わして、沈黙が続く・・・。

「やだなぁ。そんな見つめられると恥ずかしいじゃない・・・」

真っ赤になってもじもじする・・・。

「いいじゃん。穴が開くわけじゃないし・・・」

ニカッと笑って凄く嬉しそうな竜之介。

「ところで、何でベッドがダブルなわけ？」

「分からん・・・」

冷や汗たらりの竜之介。

「あんたが予約したんでしょが・・・」

「ここまでは知らなかった・・・」

「まったく・・・。襲わないでよ」

「分かってるよ！　結婚まで大人しくするよ」

「大人しくするって・・・。あんたは猛獣か？」

「かも・・・。でもさ、結婚前でもルカが許可したらいいでしょ？」

「許可しないから・・・」

「彼氏いない歴２３年の娘はガードが固いな・・・」

「ふんっ！」

バルコニーの手すりにもたれて、二人並んでハーバーの夜景を楽しむ・・・。

「もう少しで花火が始まるね」

「うん」

その時竜之介が突然ひざまづく。

「え？　なに？」

「頭が固くて、なかなかロマンティックな事が思いつかなかったんだけど・・・。　お嬢さん、良かったら、俺と結婚してください」

そう言って、リボンのついた指輪ケースを差し出した。

中にはキラキラかがやくダイヤの指輪・・・。

遥は突然の事で、唖然として固まっていたが、それから頬を赤らめ

微笑んで、手を差し出す。
「ふつつか者ですが、よろしくお願いします。指輪をはめてくれますか？」

「喜んで・・・」
ケースから指輪をとりだし、そっと指輪をはめた。
そして見つめ合って、優しくくちづけをした瞬間、花火が打ち上がった・・・。

「どう？　少しはロマンティックなプロポーズになった？」

「ええ。合格！！」

「良かった」

「ところでさ・・。とても嬉しいけど、この指輪のダイヤ大きすぎない？」

「折角ロマンティックなプロポーズしたのに、お前って奴は・・・」

「だって、こんなのつけてたら、泥棒に狙われそうだもん。恐いよー」

「黙れ、干物女！！　大人しく花火見ろ！！」

「恐いから、すぐ外して金庫に入れておこう・・・」

「全く・・・。はずすな！　ずっとつけてろ！！」

この二人・・・。この先どうなる事やら・・・。

（第９話に続く）

第8話　初デート（後書き）

やたらと会話が多くて描写が少なくてスミマセン・・・。初期の頃の作品ですので・・・。（^__^;）

第9話　恐ろしい女・聡美

竜之介からプロポーズされて、幸せいっぱいの遥。
こんなに早くプロポーズされるとは思いも寄らなかったけれど・・・
不幸のどん底の中、フラリと偶然やって来たあの牧草畑で竜之介に拾われて、あの日から幸せな日々が始まった気がする・・・。
気がつけば毎日コロコロ笑っていて、いつも充実してて・・・そして淋しくなかった。
仕事場で沢山の仲間がいるし、家に戻ればリュウがいて・・・。
ついつい意地を張って照れ隠しに憎まれ口をたたいたりして突っかかったりもしたけれど、いつも大きな器で包み込んでくれた優しく頼れる人・・・。
ここで一緒に生活して、毎日が楽しかったし・・・。そしてこれからもきっとずっと・・・。
つき合い始めたばかりで結婚の約束だなんて！！　本当に驚いた！！
でもずっと一緒にここに住んできて、なんだかもう家族のような感じもする・・・。
あの巨大なダイヤには閉口したけれど・・・。
器の大きな人だから、あの人の大きな愛情の気持ちなんだろうな・・・。

ーーーーいつも指にはめていたいけれど、あの指輪を付けて仕事はちょっと無理なので、チェーンに通して首から下げることにした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「おい！あの指輪外したのか？」
手に何もつけてないのを発見した竜之介が、不安顔・・・。

「うん・・・ごめんね。外して置いておいたら、無くしちゃった・・・」
泣き顔を作って、竜之介をジッと見た。
「おいおい・・・。あまりセコイ事を言いたく無いが、あれ、家が買えるぐらいの値段したんだぞ。ショックだな。　しょうがないまた買ってやる。プロポーズのやり直しだ・・・」
凄く焦ってショックな雰囲気の竜之介。
遥はいきなりニカッと笑って、ペロッとしたを出した。
「嘘だよ。ほらっ！」
そう言って首に下げている指輪を見せた。
「あの大きな指輪はちょっと仕事の時は邪魔になっちゃって・・・。いつもこうやって肌身離さず身に付ける事にするね」
「なんだー。流石に焦ったよ・・・。そうかーー。指輪じゃなくてペンダントにすれば良かったな」
「いいの・・・とても嬉しいから・・・。でも、もう散財しないで！！　何か言っておかないと、次々と買って来そうな予感がするから・・・」
「うーん。読まれてるな・・・。　ルカが可愛すぎて、ついつい買ってプレゼントしたくなってな・・・」
頭をポリポリと、照れ顔の竜之介・・・。
「もっと倹約する癖をつけないとダメだよ。お金が無くても工夫すると、色々楽しめるんだから・・・」
「いい事言うな・・・。ルカのそう言う所は見習わないとな・・・」

「貧乏人の生活の知恵、伝授してあげるよ」

「おう。頼むぞ！！」

「じゃあお先に仕事行ってきまーす。今日はリュウが洗濯＆掃除当番さんだね。宜しくネ・・・」

「あいよ」

玄関を飛び出していこうとした遥を呼び戻す竜之介。

「おーい！！忘れ物だぞ！！」

「えっ？」

ふり返った途端、竜之介が遥の首に手を回してチュッ！とキスした。

「朝の挨拶忘れてるぞ！！」

「ん・・・もうっ！！　行ってくるねー」

遥は手をいっぱい振って、元気よく飛び出していった。

その後ろ姿を、ほほ笑みながら見つめる竜之介。

ーーーーー自然と、家事も早番、遅番の日替わりで交代することになった。

それ以外に、忙しい時には手のあいているほうがやる。共働き夫婦のような感じだ・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ただいまーっ」

遥は、午後早めに仕事を終え帰って来て、いつもとちょっと様子が違う違和感を感じた。
この時間はまだリュウは仕事中のはずだ・・・まさか！！泥棒でも！！
ラブ犬の聡美がなんかちょっと落ち着きが無い・・・。
ふとみたら、玄関に女物の靴が置かれている。この靴ってもしかして・・・ちょっと嫌な予感がする。

「聡美、どうした？　リュウが戻ってるの？」
部屋の中がシーンとして、変だ・・・。
「いつもなら、元気な声で”おかえり”って言ってくれるのに・・・」
こんな時間に戻って来るなんて・・・まさか具合が悪くなっちゃったとか？

竜之介の部屋の扉をコンコンとノックして、
「リュウ？　いるの？」
扉を開けて、物凄い衝撃を受けた・・・。

「ヒッ！」

竜之介のベッドの上に、裸で横たわるリュウ・・・。
その上に真っ裸で覆いかぶさる聡美・・・。

聡美はこっちを向いて、ニヤリと笑った。

遥は口を押さえ、ショックで声も出ない・・・。
おぞましいものを見て、寒けを感じて、慌てて自分の部屋に飛び込んだ。
ニタリとした、勝利の顔の聡美と聡美の裸体が目にくっきりと焼き

付いて離れない・・・。

「今のって何なの？　何が起きたの？」
恋愛経験も乏しく、おつきあいした男性もリュウが初めての遥には、物凄い衝撃的な光景だった・・・。
頭の中が真っ白になって訳が分からなくて混乱してた・・・。無意識にバッグを手にとると、靴を履いて、外に飛び出した・・・。
ふらふらファームを出ていく遥の姿を、遠目で淳也が目撃して、変に思った。
「あれ・・・ハルちゃんだよな・・・こんな時間にどこ行くんだ？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あてもなく、さ迷うようにあるきまわっていたら、いつの間にか、イングリッシュガーデンの前に来ていた。
丁度、東京行のバスが来ていて、出発する所だった・・・。

そのバスにふらりと乗った・・・。
遥が乗ってすぐ、バスは出発した・・・。

バスが動き始めてから、さっきの衝撃的な光景を、恐る恐る記憶の糸をたどって思い返して見た・・・。
ベッドに横たわるリュウに覆いかぶさる聡美・・・。
いったいどういう事？
あんな優しい誠実そうなリュウが、浮気だなんて・・・。信じられない・・・。でも・・・確かにリュウだった・・・。
何度も何度も思い返しても、あれは、聡美さんとリュウで、抱きあう2人・・・。

バスに乗ってから、目から涙がこぼれ落ちた・・・。

人目も気にせずに、泣いた・・・。
日が暮れて暗くなったバスの中・・・ 窓ガラスに泣き顔の自分の姿が映った・・・。

絶望の中であてもなく飛び乗った蓼科行のバス・・・ そしてまた、絶望の中あても無く飛び乗った東京行のバス・・・。

ブルブルブル・・・ とマナーモードの携帯が揺れて、見たら淳也さんからだった。
「もしもし・・・」
消え入りそうな声で電話に出た。

「ハルちゃん・・・ 今どこにいるの？」
物凄く焦った感じの声だ・・・。

「東京行のバスです・・・」

「落ち着いて・・・ 話しを聞いて・・・」
淳也さんが何かいいそうだったけれど、言い訳なんて聞きたく無かった。
プチンと電話を切って、電源をオフにした。

自然と涙があとからあとから溢れてくる・・・。
いったいあれはなんだったの？
蓼科行のバスに乗った時も、物凄く心細くて不安で悲しかったけれど・・・ あの時よりももっと、孤独で悲しかった。

新宿に夜7時30分についた。
久し振りの東京・・・。
闇金に追われている時には、ここから夜8時発の蓼科行に乗って・・

・。

今度はここに逃げ帰ってきた・・・。

衝撃に弱い自分・・・。情けないなぁ・・・。

あの時は残金８２円だったのに・・・。今はそんな心配も無い・・・。すべてリュウのおかげだ・・・。

蓼科は時間がゆっくりと流れているような・・・穏やかで静かで・・・ファーム周辺は夜間照明でぽわんと明るいけれど、その先は真っ暗で・・・夜空の星がとっても綺麗で・・・。

バスから一歩降りた新宿の町は明るくてにぎやかで・・・車の騒音・・・人の雑踏・・・クラクラしそうに賑やかで眩しくて・・・。

今日は蓼科に帰りたくないし・・・。

どこか　泊まろう・・・。

恐る恐る携帯の電源を入れたら、着信履歴に沢山電話が入っていた。

淳也さんとその後リュウから・・・。

電話に出るのが恐い・・・。

慌ててまた電源を落とした。

とりあえず、ビジネスホテルにチェックインした。

明日はどうしようかな・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌朝、ビジネスホテルをチェックアウトして、何気なく、昔住んでいたアパートにやってきた。

あの後まだ次の住人さん決まって無いんだ・・・。

玄関扉に何か貼ってある・・・。

「連絡待ってる、静香」

「静香？！」

目が点になった・・・。

慌てて静香の携帯に電話した。

「もしもし、私・・・。アパートの扉に貼ってある貼りがみを見たんだけど、どう言う事かな？」

場所を待ち合わせて、静香に会った。

何度も頭を下げて、謝りまくる静香・・・。

「私がどれだけひどい目に会ったか？分かってる？」

「ほ・・・本当にごめんなさい・・・」

小さくなって恐縮しまくる静香。

「私の通帳まで盗んで・・・」

「あれはちょっと借りるつもりだったの。まさか警察には・・・」

「今の所届けてないけど、この先は分からないな・・・」

「返すから、どうか御願い・・・」

あの時保証人を頼まれた時は、お店の開店資金にしたいからと頼まれたんだっけ・・・。

大型ショッピングモールの一角を借りる為のテナント料だった・・・。

ネイルのお店を出すんだって張りきってたっけ・・・。

「で・・・。今何やってるの？」

「実は私も共同経営するはずだった子に騙されてね・・・。今は、お店に就職して地道に働いてるの・・・。あの、両親にもバレて物凄く叱られて・・・。遥に返す様にって親から援助してもらって・・・。これ・・・」

静香が通帳を出した。

「何これ？　あんたが盗んだ私の通帳じゃない？」

「中見て！！」

「１５００万円？」

「こんな高額なお金どうしたの？」

「親に出してもらって・・・。後は私の働いたお金もはいってる。これで許して・・・。御願い・・・」

「こんなの受け取れないよ。元々あんたのご両親に学費と生活費と返そうと思って、貯めたお金だったから、これはあんたのご両親に返すよ。お気持ちだけでって言って返して・・・」

「いや、これを遥に確実に渡さないと勘当が解かれないの・・・。だから受け取って・・・。御願い・・・」

「私も困るわよ・・・これじゃあ貰いすぎだし・・・」

「御願い・・・」

「本当に受け取れないよ。その変わりお願いがあるんだけど・・・。いま一人暮らし？」

「うん」

「じゃあ御願い・・・。家に泊めて・・・」

「そんなのお安い御用だけど・・・。困ったなぁ。これ受け取ってもらわないと、勘当解かれないのよ・・・。泊めてあげるからその変わりに、これ受け取って・・・」

「うーん。一応受け取っておくけれど、あとでおじさん、おばさんに電話して、お返しするわ・・・」

「電話するならしてもいいけれど・・・ 無駄だと思うよ。うち余裕あるし・・・」

その一言はちょっとショックだった・・・。

ご恩返しにと思って、切り詰めて貯めたお金だったけど、それを静香のご両親に渡しても、果たして喜ばれたか・・・。

静香が私にお金を借りたのは、実家のご両親にお店出店の事を知られたくなかったらしい・・・。

こんな事なら初めから両親に借りれば良かったなんて、楽観的に言うし・・・。

借金取りに追われて、私がどれだけ苦しんだか・・・。

なんか気が抜けるな・・・。

あれから静香の家で5日泊まった・・・。

そろそろ静香もうっとしく感じてる感じ・・・。

静香の両親は、唯々謝り続けて泣くばかりで、頑として受け取らず返す事も出来なかった・・・。
静香から返された通帳のお金で、アパートでも借りるかな・・・。

「静香、アパート探すわ。お世話になったね」

「やっと出て行く気になった？」

「迷惑かけてゴメンね」

「ううん。私の方がもっと酷い事したから・・・。私の方こそ本当にゴメンね」

内心、蓼科に帰りたかったけど、日が伸びるに連れて、帰りづらくなってきた・・・。
リュウが浮気するなんて・・・ 時間が過ぎてちょっと冷静になってみると可笑しな気もして、会って確かめたい気もしたけれど・・・。
恐い・・・。帰宅恐怖症の様に戻れなくなってしまった・・・。
凄く会いたいけれど・・・ 会えない・・・。
アパート探して、こっちで就職しようかな？

結局、高田馬場駅近くのアパートを見つけて、そこに住む事にした。

あの光景がどうしても頭から離れなくて、トラウマになってしまって、どうしてもリュウに会えない・・・。
あの聡美さんの姿が、不気味な笑の顔が、物凄く生々しくて・・・。
凄く凄く会いたいのに・・・ それと同じぐらい恐い・・・。

真っ白い封筒に婚約指輪と１０００万円の小切手を入れて、わざわざ秩父まで行って、そこのポストから投函して、リュウに送った。

ーーーーー忘れよう・・・。
あれは、夢だったんだ・・・。
そう、現実じゃないんだ・・・。
蓼科での事は幻だったんだ・・・。
忘れる自信無いけれど・・・ショックすぎて・・・。

携帯も変え、仕事先も見付けた。
前の会社とライバル社ではあるけれど、大手電機メーカーの事務職に返り咲く事が出来た。
このご時世に、就職先が見つかって本当にラッキーだ。

ーーーーーあれから冬がきて、春がきて・・・。
半年と言う月日が流れた。

リュウの家に私の荷物が置き去り・・・。とても気になる。
両親の写真も置いてきたし・・・。
それよりも何よりも・・・リュウはどうしてるかな・・・。会いたいな・・・。でも・・・。

思い出すと悲しくなるし、涙が溢れてくる・・・。
だから、なるべく思い出さないように心を凍らせた・・・。

新しい会社で告白された・・・。
倉橋　誠一さん。　設計部の27歳・・・。
女子社員に人気のある、明るくて爽やかな人だ。

彼には、婚約者がいた事を話して、恋愛する気にはなれないって、話してある。
彼はずっと待ってるって言ってくれた・・・。

「柊さん」

「あ・・・。倉橋さん・・・」

「社内旅行があるけど行くでしょう？」

「はい！　私、中途採用で、皆ともっと仲良くなりたいし・・・。是非・・・」

「詳細は食堂掲示板に貼ってあるよ」

「後で見に行ってきますね」

食堂の社員旅行のお知らせを見て驚愕した・・・。

蓼科？

旅行日程・・・第一日目・・・。

「イングリッシュガーデン」「竜之介ファーム？」

うそーっ！！！

（第１０話に続く）

第１０話　ドキドキの社員旅行

社員旅行前夜、旅行の準備をしながら、遥はあれこれファームの事・・・リュウの事などを思い返していた。
今でもリュウに凄く会いたい・・・。すごく帰りたいけど、あの衝撃的な場面が浮かび上がってどうしても戻れない・・・。
恋愛経験なんて初めてだったし、初めて好きになった人が元カノとあんな・・・。
凄く突然のことだったし、あまりにも衝撃過ぎて、冷静さを失って何も考えずに飛び出してきてしまった・・・。

今思い返して見れば、何か訳があったのではないか？
もし訳があったのなら、リュウの事を信じないで見捨ててきてしまった・・・合わせる顔がない・・・。
リュウの事を考えると、真夏の太陽のような、あの眩しい笑顔がすぐに浮かんできた。
本当にあんないい人が・・・自分を裏切るのかな？　なんであんな事があったのか？今でも分からない・・・。
冷静になってきた今だから、考える余裕も出来て来た・・・。
真実を確かめたい気持ちが今は大きく膨らんで来てるけれど、ファームを飛び出してからの期間が長くなれば長くなるほど、リュウに合わせる顔もなく、そんな資格もないと思った。

ーーーーやっぱり会うのが恐い・・・弱虫な自分・・・。
ーーーーリュウに見つからないようにしなければ・・・。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ーーーー社員旅行当日・・・。

集合場所は、新宿バスターミナル・・・。

今まで、髪の毛を染めた事がなかったが、遥は髪の毛を明るいブラウンにカラーリングして、ふわふわパーマをかけた・・・。
洋服はフリルリボンのブラウスと、ギャザーたっぷりのシフォン生地のミニキュロット。
色の入った、サングラスをかけて・・・。
避暑に出かける、弾けた良いとこお譲様風・・・。

ターミナルについて、倉橋さんが立っていたので声をかけた・・・。
「おはようございます」

「あの・・・。だれでしたっけ？」
初めて会う人のような、驚いた表情の倉橋。

「私です・・・。柊です」

「えーっ。柊さん・・・。どこのお譲様かと思ってビックリした。
凄く可愛いよ！　驚いた・・・」

「私だって、分かりませんか？」

「全然わからないよ」
頬を染めて、見惚れるような表情の倉橋。

「サングラスとったら？」
そう言って、サングラスをとった。
真剣な表情で、まるでスパイ映画の女ヒロインの様だ。

「とっても分からないかも・・・」
苦笑しながら、いまいち状況が飲み込めない倉橋・・・。

「良かった・・・」
ホッと胸をなでおろす遥。

「なんで？」

「誰にも言わないでくださいね・・・。実は婚約者だった人って、竜之介ファームの社長なんです」
ボソリと小声でつぶやく。

「えっ。そうなの？」
婚約者が意外な人物で驚きの表情の倉橋。

「御願い・・・。彼に見つからないように、協力して貰えますか？」

「分かった」
好意を持っている人からそんな事を頼まれて断るはずがない！！
もしかしたらこれがきっかけで、もっと親しくなれるかもと、ちょっと下心もある倉橋・・・。

「すみません。お願いします。　普段ミニなんてはかないし、こんな格好しないんですが・・・。なんか足がスースーしちゃって・・・」
自分のこの姿にちょっと恥ずかしい遥・・・。
変装じゃなかったら絶対にこんな格好しないだろう・・・。

「足が凄く綺麗だし、とても似合ってるよ！」

倉橋にしてみたら、好感度アップの好みのファション・・・ちょっと胸キュンだ！

「そうですか？」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

旅行日程初日は、初めに「竜之介ファーム」その後に「イングリッシュガーデン」で、その後今日の宿泊ホテルに向う。
初日さえクリアしたら、一安心だ・・・。

バスは、竜之介ファームに到着した。

半年ぶり・・・。懐かしいけど、恐い・・・。
あの光景がフラッシュバックして浮かび上がってくる・・・・。
何より、竜之介に会うのが恐い。
従業員の皆に合うのも恐い・・・・。

まずはここのレストランで昼食をとる。
レストラン　エントランスには『歓迎　シリウス電機　様』と書かれたボードが・・・。
まさか私が、シリウスの社員だなんて思わないよね・・・。

遥は一番奥の目立たない席に座った。
隣には、倉橋さん・・・。

ここのホールスタッフである、バンドメンバーだった、ミキティがいた。
料理を持って、こっちにやって来た。
慌てて外していたサングラスをかけ、額に手をおいて顔を隠す。

「柊さん？」
心配顔の倉橋さん。

「知り合いです・・・」
ボソリと倉橋につぶやいた。

ミキティは、ちょっと不審顔でこっちを見たが、そのまま料理をおいて厨房にもどって行った。

「よかった・・・」
もう心臓バクバクで、食事が喉を通らない・・・。

何とかレストランはクリア・・・。
次は、牧場見学だ・・・。

牧場見学は省略して、早くイングリッシュガーデンに行って欲しい・・・。

マイクロバスに分乗して、酪農牧場と工場見学・・・。
途中、社員寮とログハウスが見えた。
懐かしいな・・・。
あのログハウスに「ただいま」って帰りたい衝動に駆られた・・・。
その後に、ふっとあの聡美の姿が浮かんで身震いした。

牧場に到着して、一番後ろに隠れるように立った。
心臓が凍りついた・・・。『リュウだ・・・』
何か、頬がコケて随分とやつれて、何処か悪いんじゃないかって思うぐらい痛々しい感じだった・・・。
あの大らかで、健康的なお日さまのようなリュウじゃない！！
胸がギューッと潰されるような気持ちになった・・・。
駆け寄って抱きつきたい衝動をグッと抑えて、心を凍らせた。

それから前の人に隠れるように、立った。
リュウが牧場の説明をした。
懐かしい声・・・姿・・・。
「あの人が柊さんの？」
倉橋さんが、竜之介をじっと見る。
「そうです」
ちょっと声が震えていた。
「それでは、工場の見学コースを見て回ります」
リュウが先頭になって、工場に入って行った・・・。
「どうぞ順序良く交代で、見てください」
遥はどうせ知ってるからと思って、見にいかなかった。
出来るだけリュウと距離を置かないと・・・。
次は、豚舎・・・。
豚舎の中には一般の人は入れないが、ガラス越しに見学できる場所がある。
懐かしい皆の働いている姿が見えた。
小鬼もいた・・・。
みんなーっ！！って叫びたくなった。胸が苦しい・・・。
また順番で見る箇所があったが、知っているのでここもパス・・・。
早く終って欲しい・・・懐かしくて、思い出がいっぱい詰まってて、辛い・・・。

その時だった・・・。
「お客様は、こう言うものに興味がありませんか？」

「え？」
と思って見たら、リュウだった・・・。
ギクッ！とした・・・。

「すみません。いつもご覧になってないようだったので・・・。
沢山の人に見てもらいたい、興味を持ってもらいたいって思って日々頑張っておりますので・・・。こうして欲しいとか、こうしたらもっと魅力的になるとか、何か要望などございましたら参考にしたいなと思いまして・・・」
こんなに近くで話すのって・・・久しぶりだ！！心臓バクバクする・・・。

「いえ・・・。そう言うわけではありませんので・・・」
声のトーンを変えて、口早に答えた。
遥が喋った時に、リュウがビクンと反応した感じがした。

「行こう・・・」
倉橋さんが、助け船を出してくれて、手を引いてくれた。

うわっ。リュウがこっちを見てる・・・。
バレた？！
凄く不審顔だ・・・それともファームに興味ない客だから？

最後にお土産コーナーに行って、終了だ・・・。
良かった・・・。
早くイングリッシュガーデンに行きたい・・・。

その時だった・・・。
「柊さーん！！」
同じ総務課の人たちが、声を合わせて大きな声で呼んだ。
『うわあああ・・・。まずい・・・』
慌ててみんなの所に走って行った。
「な・・・。何ですか？」
「総務課の皆で、写真撮ろうだって！！」
「はーい！！」
「写真お撮りしましょうか？」
リュウがこっちにやって来た・・・。
「皆さん、並んで・・・。そこのお嬢さん、サングラスとって・・・」
その言い方が、ちょっと意地悪そうに聞えた。
「え？　あたし？？」
半ばやけな気持ちで、サングラスを取って並んだ。
あくまでもしらをきろう・・・。
『そう私は、同姓同名の人で、ここで働いていた遥じゃないんだ・・・』
自分に言い聞かせる・・・。
写真をとった後、みんなが解散し始めた時に、グイと竜之介に手をつかまれた。
「ルカ・・・。あまりにも変わっちゃったから、驚いたよ」

「え？　どなたですか？　人違いじゃありませんか？　すみません。バスの時間があるので、失礼します」
リュウの手を振りほどいて、倉橋さんの腕を引っ張って、「行きましょう」と言って、慌ててバスに乗り込んだ。

バスに乗り込んだ私を目で追って、じっと見る竜之介。

やっぱりバレてる・・・。

バスが発進するまでリュウは遥を目で追っていた。
ファームを離れて、ホッとした・・・。
淋しいけど、あの時の光景が目に焼き付いて・・・。恐い・・・。

イングリッシュガーデンに到着・・・。

一安心だと思って、もうサングラスも外して、総務課の皆と、倉橋さん達設計部の皆と一緒にガーデンを見て回った。
ファームでの時間は凄く苦痛の時間だった・・・。
胸が締めつけられて息苦しくなって・・・ 無理に元気ぶってないと涙が溢れてきそうだった・・・。

「遥ちゃん、ハイポーズ！」
総務課の同世代の、沙織ちゃんの掛け声で、木のトピアリーの前でおふざけポーズ・・・。
わざと変な顔をしてポーズをとった。

皆がゲラゲラ笑って大受け・・・。
私も大笑い・・・。
その時、ふと視界にリュウの姿が見えた。
『ゲッ！　ここまでついてきたの？』

心臓が凍りつく・・・。

気にしない、気にしない・・・。

「ねえ皆で、お茶しない？ここのケーキ美味しいんだって・・・」

「いいね」

「うん。そうしよう・・・」

「誠一さん、行きましょう・・・」

わざと倉橋さんの名前を呼んで、親しそうに腕を組む・・・。

「ヒュー、お二人さん仲いいね」

皆が冷やかす・・・。

リュウの鋭い視線がグサグサ刺さる・・・。

お茶して出てきたら、リュウの姿は無かった・・・。

これでいいんだ。

リュウのあのやつれよう・・・ あの様子・・・ やっぱりあの時何かがあったんだって感じた。

そんなリュウを見捨てて逃げてきてしまったんだ。

こんな薄情な人間の事なんて忘れて、頑張って！！

私の為に、そんなやつれちゃダメだよ・・・。

皆で、木の巨大迷路に入って行った・・・。

『どうせなら、ここで鬼ごっこしようよ』

仲間の提案で、皆で鬼ごっこ・・・。

そのうち逸れてしまった・・・。

『皆どこ行った？』

その時だった・・・。
グイッと手を引っ張られた。
「ルカ・・・」
そこにはいつもの明るい表情の竜之介はいない・・・。
こんな真剣な顔・・・仕事意外の時に見た事があっただろうか？
「リュウ・・・」
凄く恐かった・・・。
「今、リュウって言ったね。　やっぱりルカだったんだ・・・」
バツが悪くて顔を背けた。
「突然居なくなって、心配したし、ずっと探してたんだぞ」
「あんな事があって、平静でいられる？　もうショックで、恐ろしくて・・・」
ゴメンって言えなくて、突っかかるような事を口に出した。
「ゴメン・・・。でも、あの時は睡眠薬を盛られて、気がついた時には病院のベッドだったんだ・・・。すぐに電話したのに繋がらなかった・・・」
「えっ？睡眠薬？」
思いもかけなかった事に驚いた。
「牧場で仕事してたら、聡美から声をかけられてね。差し入れだってペットボトルの飲み物を渡されて・・・ちょうど喉が乾いている

所だったから疑いもせずに一気飲みして・・・その後なんだか頭がクラクラしてきて・・・これはダメだって、ログハウスに戻って少し仮眠でもとって仕事に戻ろうと思って、ベッドで横になったらもう意識がなくなってた。
淳也がルカの姿を見かけて、可笑しいと思ってその後すぐログハウスに来てくれて・・・俺が目覚めた時には病院のベッドの上だった」

「そうだったの？　私・・・仕事が終わって、なんだか様子がいつもと違うなって思って、リュウが具合悪くしたのかなって、部屋をノックして入ったら・・・。
あなたの上に、真っ裸の聡美さんが馬乗りになってたのよ・・・。ニヤリと笑った聡美さんが恐かったし・・・あんな場面見て凄くショックで・・・パニックになってしまって・・・気がついたら東京行のバスに乗ってたの・・・」

「恐い思いさせてしまったね。聡美の事は警察に届けたから、もう近づけないと思う・・・。犬は、淳也に引き取って貰った・・・」

「私・・・あなたを見捨てて逃げ出しちゃったのよ・・・後で変だなと思ったけれど・・・もう戻れなくなって・・・」

「ルカは、潔癖症で、清純だから・・・。あんな薄汚れた姿を見て物凄いショックを受けちゃったんだね。俺の事嫌いになったの？」

「嫌いじゃないけど・・・。恐くて・・・あそこに戻れなくなっちゃったの・・・」

「嫌いになったわけじゃないんだね」

「うん。だけど、あなたを見捨てて、目の前から消えちゃったんだ

よ私・・・。もうあなたに合わせる顔がないよ」

「あんな事があったんだから、しょうがないよ。　俺は全然気にしてないし、もう一度やり直そう」

「でも、戻りたいけど戻れない・・・恐い・・・」

「じゃあ、心の傷が治るまで、今のままでいいから、ひとつひとつ問題を解決していこう・・・。俺はまだ諦めてないよ。というか、諦められないから・・・。俺の事嫌いになった？」

ふるふると遥が首を横に振った。

「本当はすごく戻りたかった・・・でも・・・戻れなくなっちゃって・・・」

「すぐじゃなくていいからさ・・・俺が会いに行くから・・・あの家はツキが落ちたから建て直すよ」

「えっ？」

「って言うか結婚したら手狭だし、もっとおっきな家を建てようと元々思ってたから・・・」

「えええーっ」

「もう一度俺達やり直そう・・・」

「こんな私でいいの？」

「ルカ意外考えられないから・・・」

「本当に？」

「おおっ」

「ありがとう・・・」

「う・・・ん。携帯番号変えただろう？　連絡先教えてよ」

「うん」

赤外線でリュウに番号とメルアドを送った。

「会社は土日休み？」

「うん」

「じゃあ今度の土曜日、会いに行くから、いい？」

「うん」

「じゃあ、会社の仲間がそろそろ来るだろ？　俺は行くよ。絶対に会おうな」

「うん」

竜之介がギューッと抱きしめて、唇にチュッとキスをして、ポンポンと遥の頭を優しく叩いて手をひらひらさせて消えていった。

ボーッとのぼせる遥・・・。

「遥ちゃーん、凄い最後まで見つからなかったよ！！」

会社の人の声でハッと我に返った。

「じ・・・じゃあ私が一等？」

「そうそう・・・。一等だから、アイスおごるよ・・・」

「やだぁ。さっきケーキ食べたばっかりだよ」

皆で大笑いして、出口に向った。

陰からその様子を見る竜之介・・・。

「ルカ、メッチャ綺麗になったなぁ・・・。特に、あの倉橋って言う奴が危険だ・・・。取られないように気をつけないと・・・。でも、見つかって良かったー」

（第１１話に続く）

第１１話　究極のプロポーズ（最終話）

社員旅行から帰って来て、暫くしてからリュウから電話がかかって来た。

「もしもし・・・。リュウ？」

「おう。今何してるの？」

「仕事から帰って来て、晩ご飯中・・・」

「メニューは？」

「焼き魚と、ほうれん草のお浸しと、ご飯と、みそ汁・・・」

「いいなー。美味しそうだな・・・」

ちょっと舞い上がったような凄く嬉しそうな竜之介の声が聞えて来る。

ふとゲッソリやつれた竜之介の痛々しい姿が浮かんできて、胸がキュンとした。

「リュウ、ゲッソリやつれちゃって驚いたよ。ちゃんとご飯食べないとダメだよ！」

「ルカが消えてから食欲なくなって・・・。俺はルカの前だけは弱虫なんだ。ルカがいないとダメだ・・・」

ちょっと声が弱々しい感じで、心が痛んだ。

「もう・・・。いつものあの俺様口調はどこにいったのか？」

「ルカが消えてから、何処かに吹き飛んだ・・・」
その言葉にぽろりと涙がこぼれた・・・ゴメンねリュウ・・・。
それを払拭するように、わざと元気な声で言った。
「しっかりしてよ。赤鬼！！」

「おーっ。久し振りに聞いたぞ！！」
リュウの弾んだ声が聞えて来て、ホッとする。

「だんだん声が元気になって来た。その調子！赤鬼！！」

「よっしゃーっ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

土曜日に竜之介がこっちにやって来る事になっていたが、あいにく遥は休日出勤となった。
遥の勤めるシリウス電機の製品が家電製品・オーディオのショー『エレクトロテスト・ジャパン』に出品。
その手伝いの為だ。

遥は受付嬢で手伝う事になった。
「お客様、当社の資料をどうぞ・・・」
そう言って、資料の入った封筒を渡したら、竜之介だった。

「わぁ・・・来てくれたんだ・・・」

「おうっ。ルカの仕事する姿が見たくてな。スーツ着て、社員証首から下げるその姿、カッコいいね」

ニコニコと嬉しそうな竜之介・・・。
あれからすっかり元気を取り戻した様で、血色も良く、久しぶりにお日さまの笑顔を見た。

「そ・・・。そんなこと・・・。恥ずかしいなー。」
ポッと赤くなって、モジモジと照れた。

「あら？皆も来たの？」
ふとリュウの後方を見たら、ヒロ、ジョー、ミキティと淳也も来てる・・・。それに・・・。
「何で小鬼まで来てんの？」

「くっついて来ちゃった。その姿カッコいい！！」
興味津々で上から下まで舐めるように見た。

「もうやだなー。ゆっくり見て回ってね」

その時、室長から呼ばれた。
「柊さん、説明お願い」

「はーい。失礼するね」
みんなに声をかけて、お客様の所に飛んで行った。
「お待たせしました。当社の液晶テレビの特徴は・・・」

「なんか、ハルちゃんカッコいいっすね」
ポーッと見惚れたようにジョーが見た。

「ファームの時も元気いっぱいで仕事頑張ってたけど、キャリアウーマン姿もいいなー」
ヒロもうっとり・・・。

「うんうん・・・」
ミキティも嬉しそうにうなづいた。傍で淳也もほほ笑ましそうに見てる。

「おいおい・・・。みんな目がハートだぞ！　もう連れて来ないぞ！！」
その様子をみて不満そうな竜之介。

「あ・・・。社長が焼きもち焼いてる・・・」
小雪が意地悪そうにからかった。

「ちぇっ！」

こう言ったショーには、マニアックなカメラ小僧が必ず出没・・・。客の要望にはスマイルで答えて、写真撮影にも応じなければ行けない・・・。
竜之介は気が気でない・・・。
「ちえっ。ルカの奴、満面の笑顔で撮影に応じて・・・」

そんな様子を見ていると焼きもちで頭がいっぱいになって、爆発しそうなので、他のブースなどぐるりと見て回る事にした。
夕方5時にショーが終るので、その頃また遥のブース「シリウス電機」の前に来る事にした。

戻って来たら、シリウス電気の美女コンパニオン嬢一同、ブースの前で一列に並んで、終了前の挨拶をして、スマイルで深々と一礼・・・。
それと合わせて、受付にいる遥も深々と頭を下げた。
こうやってみると、雑誌から抜け出たモデルみたいだ・・・。遥も

輝いて見える。

「ルカの奴！！カメラ小僧にスマイルで手なんか降って・・・。ムカツク・・・」

竜之介はさっきからブツブツ文句ばかり・・・。

ショーが終って、竜之介がゲート前で待っていたら、遥が着替えて出てきた。

「ごめんなさいね。やっと終ったよ。あれ皆は？」

「折角こっちにきたから、夜景を見に遊びに行ったよ」

「そうなんだ。おなか空いちゃった・・・。食事にいかな・・」

と言いかけた時、竜之介がいきなり抱きついて、キスした。

いきなりキスする竜之介に驚く遥・・・。

「キャッ・・・。」

「ごめん。ずっと　ずっと　会いたかったから、気持ちがコントロール出来なくて・・・。つい」

その様子にまんざらでもない遥・・・。

「私こそ、ごめんね。いっぱい謝らないと・・・　私も凄く会いたかった・・・」

お互いに愛おしげに暫く見つめあった。

「食事しながらゆっくり話そうか・・・」

「うん」

「ほらっ・・・」
竜之介のゴツゴツした大きな手が伸びて、遥の手をそっとつかんだ。
「うん・・・。手を繋ぐの久し振りだね・・・」
遥は頬を染めて、恥ずかしげに俯いた。
「うん。これは幻じゃないよな」
「幽霊じゃないよ」
「よかった・・・」
二人、手を繋いで町中を歩きながら話しが弾む・・・。

ーーーーーー高層ビルの最上階の、フレンチレストランに来た。
「ここの夜景、綺麗だよね」
「うん。でもルカを見ている方が、全然綺麗だ・・・」
頬杖をついて、嬉しそうにニコニコしながら竜之介が遥を見た。
「やだー。恥ずかしいな・・・。そんなに淋しかったの？」
遥も頬杖をついて、竜之介をジッと見た。
「もう、死にそうに淋しくて、毎晩ルカの置いて行ったアルバム見て泣いていた・・・」
「やだー。幼い頃のとか、学生の頃のとか？」

「うん。いやあ可愛かったよ。高校生のはさすがお譲様高校だな・・・。制服姿が可愛い・・・」

「ひゃー。恥ずかしい・・・」

「そう言えば、封筒に小切手と指輪入れて送って来ただろ。凄くショックで1週間寝込んだぞ」

「ごめんね。もうダメだって思ったから」

「そんなに簡単に諦めないでくれ！！　そうだ、あの小切手どうしたんだ？」

「そうそう・・・。静香に再会して、親にメチャメチャ叱られたらしくて、返せって静香にお金を渡したらしくて・・・。私が受け取らないと勘当が解けないらしくて、渋々受け取ったの」

「そうだったんかー。なんかあの金を受け取ったら、ルカとの縁が切れてしまいそうで、またお前の通帳に戻して置いた」

「えーっ。知らなかった・・・」

「俺は一円も受け取らんぞ・・・」

「静香の両親は受け取ってくれないし・・・。困ったな・・・」

「まあいいじゃん。とっておけ・・・」

「う・・・うん。何か役に立つ事にでも使わせていただくわ・・・」

「婚約指輪は、渡してすぐにこんな悲惨な事になったから縁起が悪いと思って処分した」
ちょっと眉をよせて、ムスッとして言った。

「処分ってどうしたの？」
目が点の遥。

「ルカのばか野郎！！って叫んで、蓼科湖に投げ入れた」

「えええーっ・・・勿体ない・・・」
唖然として口が開いた状態の遥。

「嘘だよ。指輪嫌いみたいだから、ネックレスに作り直してもらった。また受け取ってくれるか？」
そう言って、リボンのついたケースを、ルカの前に置いた。

「なんか、そんな資格があるのか・・・。リュウから逃げ出したんだよ。酷い事したし・・・」

「そんなの全然気にしないよ。俺はルカがいないとダメなんだ。俺の事、まだ愛してくれてるんなら貰ってくれよ」

「ありがとう・・・」

「俺は、ルカが逃げても何度でも追いかけるから・・・。俺がルカを追いかけなくなる時は、ルカが本当に俺の事を必要としなくなった時、要らないって思った時だから・・・」

「そんなに思って貰えて嬉しい・・・」

目をうるませて頬を染めた。

「中空けてみて・・・」

「あれっ？　石が増えてない？」

「そう・・・。真ん中の大きいのが元々の石・・・。その周りに小さいのをちりばめて、ハートの形にしたんだ。俺の心・・・」

「わぁっ・・・すごく可愛いね。ありがとう・・・」

「リュウ、あれから血色も良くなって、元気になったみたいで良かった」

「やっとルカを見つけられて、メキメキ元気になったんだ。もう蒸発するなよ」

「うん。もう絶対にいなくならない」

その言葉に竜之介が嬉しそうに笑った。

「この間の社員旅行の時の、ミニ姿は、ビビったぜ！」

「あれ？　絶対に見つからないように変装したつもりだったんだけど・・・」

「なんか凄く可愛い子が居るなって、気になってずっと目で追ってた・・・。何となくルカに雰囲気が似てるなって思ってたら、ルカだったから驚いた」

「なんだ、変装してもすぐにばれちゃったんだ・・・」

「もう、ショックだったよ・・・。もう少しで本当に逃げられる所だった・・・」

「だって、合わせる顔がないし・・・。ずっと本当は帰りたかったけど、勇気が出なかった・・・」

「まあ、こうやって、再会できたわけだし、全て良しとしようや」

「うん。リュウじゃなかったら、許してくれなかったと思う。全然叱らないし、何でそんなに寛大なの？」

「それはルカに　めちゃくちゃ惚れてるから・・・。ルカだけには俺、何でも許してしまいそうだ。もう骨抜き状態だからな・・・」

「初めて会った時の、俺様上から目線はどこにいっちゃったんだろう・・・」

「お前の鼻息で全て吹き飛んだ・・・。恐ろしい奴だ！！」

「もうーっ！！」

それから2人でグラスを傾けて、ワインで乾杯した。

「そうそう・・・。今、新しい家のプラン練ってる。建て直すから安心しろ。もう忌まわしい記憶とはおサラバだぞ！！」

「え？本当・・・悪い事してしまったね。申し訳ないな・・・。もう心の傷も癒えたし、無理しなくて、あのままでいいよ」

「いいんだ。俺も嫌な記憶が蘇ってくるし、独身仕様の間取りだったから・・・」

「え？うそーっ。あんなに広かったのに、独身仕様なの？」

「そうだ」

「本当に、私とは全てスケールが違うね・・・」

「間取りとか、仕様とか、希望する事があったら言ってくれ・・・。二人で住む家だし・・・」

「うん。分かった・・・」

「会社の方は、どうするんだ？」

「あまり長く勤めないうちに辞めてしまうのは、心苦しいけど、家が完成したら蓼科に戻ろうかな・・・」

「そう言って貰えると嬉しいけど、本当に良いのか？」

「私、ファームの仕事気に入ってたし、あなたの側に居たいし・・・」

「今度はゲート作って、部外者は簡単には入れないようにしたから、安心しろ・・・」

「うん」

「あのファームって、まだ開発してない土地が沢山あるのでしょう

？」

「手付かずの土地がいっぱいあってな、管理が大変だ」

「私やりたい事があるんだけど・・・」

「なんだ？」

「小さな畑でいいんだけどね、ハーブの畑やってみたいんだ」

「気が合うな・・・。俺も考えてた」

「わあ、本当？」

「私、ハーブ料理とか、クラフトとか、アロマテラピーとか・・・。興味があったの」

「実は、そう言ったもので、観光客のハートをガッチリ掴まないとって、構想を練ってたんだ・・・。隣のイングリッシュガーデンに最近ごそっと客を持って行かれてるしな」

「リュウは凄いな・・・。経営者の顔してる。　色々考えてるんだね」

「まあな。社員の生活もかかってるし・・・」

「俺に協力して力になってくれ」

「うん。微力ながら頑張る・・・。もっと勉強して、資格も取ろう・・・」

「それは助かる・・・」

「そうだ・・・。このネックレス・・・・。私が蓼科に戻る時までまだ持って居てくれる？」

ちょっと淋しそうな顔で遥を見た。

「受け取ってくれないのか？」

「もう一度、究極の場所で、プロポーズして欲しいの・・・」

「なんだそんな事か・・・。またあそこでか？」

「ううん。もっとロマンティックで最高に素敵な場所だよ」

「一体どこだそこは？」

「まだ教えない。　時期が来たら教えるから、それまで預かっててね」

「分かった・・・」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

そして新しい家も完成した・・・。

今度は赤毛のアンに出て来そうな、可愛らしい切り妻屋根の、アーリーアメリカンの家だ。

外観や形は遥好み・・・。トンガリ屋根の上には風見鶏もついている。

玄関前にはウッドデッキがついていて、木のブランコが揺れている。
家の大きさはとてつもなくデカイ！！　部屋数も多い　・・・。こちらは竜之介好み・・・。
サンルームもついていて、中には小さな噴水や池に、ハンモックもある。

今日は遥が蓼科にやって来る日。
会社は寿退社して、アパートも引き払った。

世の中には美しく純粋な事ばかりではない・・・。
醜いもの、汚れたもの、汚い物も存在する・・・。
少しは大人になった遥は、あのおぞましい聡美のあの光景も、目を背けず、受け止められるようになった。

全ては心ひとつ。
醜い物に汚されそうになっても、自分のまっすぐな心で跳ね返す事ができる。
二人の愛があれば・・・。
純粋で真直ぐな竜之介は、絶対に自分を裏切らない・・・。　今なら１００％信じる事が出来る。
もう惑わされない・・・。

「やっと戻って来てくれたな・・・」

「うん。やって来たよ！」

「凄く嬉しいよ・・・」

「ねえ、リュウに預けておいたあのペンダント、持って来て」

言われるままに不思議に思いながら、家から持って来た。
「これどうするんだ？」
「じゃあ、これから車に乗って、私の言う場所に連れて行って・・・」
「うん、分かった・・・。これから　東京冒険ランドはちょっと無理だぞ・・・」
「そんな遠くじゃないから・・・」
ちょっと首を傾げながら、竜之介は遥の言うままに車を運転して、ついた場所は拍子抜けするほどすぐ近くだった・・・。
「ここは・・・」
「そう、あなたと初めて会った場所・・・」
「そうだったんか」
ーーーーーそこは、竜之介と初めて出会った牧草畑だった・・・。
「やっぱり、二人にとってここが一番究極の場所だって思うの」
「季節も出会った頃と同じだな・・・」
「リュウ・・・。　一生あなたと一緒に生きて行くからね・・・」
「ルカ・・・。俺と結婚してくれ！　一生大事にするからな」

「うん」

竜之介は、あのネックレスを遥の首につけた。
大きなダイヤと小さなハートのダイヤがキラキラと輝く・・・。

遥は大の字になって、牧草畑に寝ころんだ。
その隣に、竜之介が寝ころんで、優しく遥の手を握った。

微笑みあう2人・・・それからそっとキスをした。

二人並んで大の字になって、空を見上げた・・・。

「私ね・・・ここであなたに拾ってもらって良かった」

「そうか？おれもこの畑で、嫁さん収穫出来て最高に幸せだよ」

「ふふふっ・・・。空が青いね！」

「そうだな」

「幸せだね」

「おうっ！最高！！」

（ーーーＥＮＤーーー）

第１１話　究極のプロポーズ（最終話）（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございました。

このお話しはこれでとりあえず終幕ですが、番外編で2人の新婚編（読み切り）を番外編で書こうと思っております。

あのラブ犬のワンコも登場の予定です。（＾＾）

またお会いする時まで・・・。（＾－＾）／~~

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8120t/

牧草畑でひろった彼女

2011年7月3日22時36分発行